

# ドールブレイクゾーン 機械仕掛けの彼女

甘原彩瀬

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

西暦2053年

侍女人形それは、宇宙から降り注ぐ放射線コスモグラノを用いて核爆発を起こし稼働するアンドロイド。

それは、心と意志を持ったアンドロイド。

人々は、されらを、人生のパートナーとして、あるいは仕事の相棒として共に生活をし。

あるいは、侍女人形に武装され戦わせた。

侍女人形に武装させチームを作り、戦わせる二種類のスポーツ、ドールブレイクゾー

ン

そして、ドールブレイクゾーンに出る侍女人形を人々は、第一種戦闘侍女人形と呼んだ。

# 目次

一年生 一学期編

第1話女の子に担当されて、そのまま  
寝ると正直言つて、お腹が痛い | 1

第2話戦闘侍女人形つてプラモデルみ  
たいに組み立てられないんだ | 22

第3話誰がクラス委員長になつたてど  
うでも良くね | 42

第4話ラ・モルトつてフランス語で、死  
神つて意味なんだぜ | 56

第5話空中戦がダメなら、地上戦があ  
るじゃない | 67

第6話いくら機械だつて全裸で

戦わせるつて | 70

第7話 決着 | 75

第8話 賽は相手の顔面に向かつて投

げられた | 79

第9話 ゲームスタートだ。 | 85

第10話 砲弾の嵐の中で | 89

第11話 トラア!トラア!トラア! | 95

第12話 「仕留めきれなかつたか」 | 99

第13話 ぶつたな。母親にもぶたれ

た事がないのに | 103

## 一年生 一学期編

第1話女の子に担がされて、そのまま寝ると正直言って、  
お腹が痛い

2055年4月5日午前 10時15分

俺、岩本燐は戦闘侍女人形せんとうじよにんぎょうの死体の山の間を彷徨い続けていた。

空は赤く染まり、機械の破片や空薬夾からやつきょうやオイルなどが散乱する地面をただ歩いていた。

俺の背中には、細長い凍りでできた槍が背中に刺さっていた。

幸い、致命傷ではなかったが、傷は出血してなかったが、凍傷になりつつある。

本来なら安静にするのがいいのだが、しかし俺は、それでも歩みを止めなかった。

周りにはうめき声や銃声や爆発音が聴こえる。そんな中、ひときわ大きく遠くの方で、大きな爆発音と共に煙が上がるのが見えた。

「あの爆発は味方か？敵か？」

状況判断のため、腰にぶら下げている端末を開くが最悪な事に画面が割れていてうま

く見えない。

舌打ちをしながら後ろを振り返る。

「散火、今の爆発は、どつちかわかるか？」

白く長い髪の少女は、首を横に振る。

脳裏に、仲間達が全滅した姿が浮かぶが、頭を振ってかき消す。

「とりあえず、ランディングゾーン<sup>点</sup>まで歩こう」

「了解」

再び足を出すが、体が大きく揺れて倒れる。

つま先に力を入れるが、思うように入らない。

「散火、体力が限界のようだ、背負えるか？」

散火は、俺の首根っこを掴み肩で担ぐと歩き始めた。

「ご主人様は、今は休んでいてください、私がランディングゾーン<sup>点</sup>まで運びますからね

…」

散火の人工髪から甘くて少し焦げたような匂いが鼻をくすぐり安心感をだしてくれ  
る。

少し休もう、すこしこれまでの経緯を思い出そう。

2055年3月20日 午前10時20分 彩雲辰人

太陽が徐々に暖かくなってきて、店の窓からカウンターを照らす。

俺、はカウンターの椅子に座り行儀悪くカウンターに足を乗せて居眠りをしていた。

誰も来ないし、今日はこのまま昼まで寝よう。

徐々に、夢の中に入っていくような気持ちがいい感覚が訪れる中。

「いいのですか？このまま寝ていて」

ふと、耳元で、大人びた声が聞こえると同時に眉間と鼻との間に何か置かれた。

しかし、今の俺には気にする事もなく、顔を傾け何かを落とすと。

「あつづ。てめー、人の顔面に、白湯を乗せるなよ」

胸元の熱い感触で一気に覚醒した目で胸元を見ると白湯が掛かっかけて濡れていた。

「あらら、まだ一分もたっていませんよ」

落下中コーヒーカップとカップ皿を燐とした姿で掴み取で、この女は俺の眉間に指を指す。

こいつの名はスカイランナー皐月惨式、俺の戦闘侍女人形だ。

性格はいいのだが、たまにこういったいたずらをしてくる。

「いいじゃないですか、暇だから」

確かに、店には、お客さん来る気配がない。

「今日は、まったりの日か」

身体を伸ばしながら立ち上がり、店の奥にある商品の整理に向かう。

「ここ最近、いろいろ忙しかったから、たまにはこうゆうのも悪くないですね」

つたく、暇でしようがない、せめて、商品の陳列確認と掃除だけでもやろう。

皐月も、商品にかかっている埃を落とす。

店内を見回す、かなり古めかしい和の作りとなっており、今時、珍しすぎる白熱電球が店内を照らす。

店の外には小さな川が流れており、こんな風に静かな時には、川のせせらぎが聞こえてくる。

「あ……」

皐月が外を見ると何かを見つけたようだ、少し気になったが商品の整頓で手を止められなかった。

「皐月、油売っているんだったら、下着の整理を手伝ってくれよ」

「下着整理をすればいいんだね、分かったよ」

皐月が小走りに来る。

「これの整理頼むね」

俺は、畳みかけた戦闘侍女人形用の下着を皐月に渡すと同時に、店の扉のベルがなっ



た。

見たことのない少年が姿を現した。歳は、俺と同じ15歳に見えるが？

「あのすいません、こちらに、魔鬼型散火つて置いておりますか？」

俺の耳に聞き覚えのある単語が入ってくるが、その単語は、俺にとって少し嫌な予感がする単語だった。

少し警戒しながら答える。

「はい、ありますよ、こちらにどうぞ」

警戒しながら戦闘侍女人形コーナーに案内する。

「これですね」

ガラス棚の中で立っている少女を指さす。

白いく腰まである髪に、左右が整えられた顔。豊かな胸の前に、鞘に入った短刀と大型銃が握られた手が交差している。

「これが…散火…実在したんだ」

と、少年が小声でいった。

ここで一つ、俺がどうして警戒するって？

それは、ここで売っている戦闘侍女人形の名は宣伝してないからだ。

例外があるが、あまり宣伝はしないようにしている。

なのに、どうしてこの少年は知っているだ？少し探りを入れてみる。

「お客さん、どうしてこの娘の名前を知っているんですか？」

後ろから皐月が姿を現す。腰にある刀を一本抜きながらつておい、それはやめろ。

「皐月、抜刀はやめろ、構えるだけでいい」

皐月を後ろから抱きしめ刀を抜けないようにする。そうでもしないと、こいつ本当に斬りそうだからだ。

「あ、姉から、彩雲工房で作られた戦闘侍女人形、魔鬼型散火を買って言われて、そこら中のお店をあたってたけど見つけれなくて、もう一回姉に聞いたらここにあるって……」

「お姉さんの名前は？」

少年は、怖がって唾を飲み込みながら答える。

「岩本綾香です」

聞き覚えのある名がまた耳に入ってくる。

岩本綾香、うちの元テストマスターで今は引退して、ドールブレイクゾーン世界大会の選手をしているはず。

そして、俺の頭の中で、一つの名前が浮かび上がる。

「もしかして、お客さんの名は岩本燐ですか？」

少年の眉間に少ししわが寄る。

「はいそうですけど、なんで、俺の名を？」

「昔、綾香さんから聞いた事があってな、俺と同じ年の弟がいると」

「臯月は、警戒しながら刀から手を放し、少し考える。」

「綾香って誰です？」

「臯月は、綾香に出会ったことは無く、初めて聞くだろう。」

「岩本綾香、元彩雲工房専属テストマスターだよ。」

「つつても、死んだ両親たちの代の話だからな、ちっさい時に面倒とか見てもらっていったんだよ。今は、たまに、うちの商品を買いきたりしているね」

「いつも、姉さんがお世話になっていきます」

「燐は、頭を下げる、臯月もつられた頭を下げた。」

「臯月コーヒを淹れてくれ、燐は、こっちに來て色々手続きをするから」

「カウンタに案内させ、色んな書類を取り出す。」

「ライセンスカード持つてる？」

「ライセンスカード、戦闘侍女人形を購入したり所有するのに必要なものだ。」

「免許書みたいなものかな？」

「仮ライセンスですけど、どうぞ」

燐から、ライセンスカードを受け取る。

学生書みたいな大きさのカードには、少し笑っている燐の写真と、知っている高校名と仮免許の印があった。

「ほう、黒川学園に入学するのか、俺と同じだな」

ライセンスカードに書かれていることを幾つか、書類に書いてから渡す。

「そうなんですか。名前聞いてもいいですか？」

燐はカードを受け取りながら俺の名前を聞いてくる。

「彩雲辰人だ、よろしくな」

燐に手を差し出し握手をした。

その後の手続きは、何もなく順調に終わったのであった。

2055年4月5日午前 10時35分

突如、腹部に強い衝撃が走り、夢から目覚める。

瞼を上げると散火の胸が視界に入り、少し目をそらした。

どうやら、散火の肩で寝ていたらしい、コロンの匂いが鼻をくすぐる。

「もう少しで、ララン<sup>機</sup>ディングゾーン<sup>点</sup>です」

散火は、俺の頭を撫でながら、岩ばかりの坂を上る。

しばらく、坂を上っていると、大きな岩の影に、迷彩模様のテントが数か所張られていた。

中央にあるテントの中に入ると、4人の少年達が、長机に地図を広げ何やら言い争いをしており喧嘩寸前になっていた。

俺は、争いを止めるため、散火から降りて歩み寄ると再び視界が大きく揺らいだ。

2055年4月1日 12時45分

島根県黒川学園、それは、島根県内にたった二箇所存在する、ドールブレイクゾーンに出場が出来る選手を育成するための学園、そして、その学校の校門には「黒川学園入学式」と書かれた簡素な看板がかけられていた。

「でけえ〜」

俺は、校門をくぐりながらそう口から言葉をこぼした。

正面玄関には、新入生の担任らしき人が新入生の名前を聞いたりクラスの位置を教えていた。

あそこに行けばいいのか、オレはゴマ塩頭の教師に歩み寄った。

「え…っと、古風五十鈴だね、はい、これ。クラスの名簿と地図ね。」

教室は、このまま廊下を真っすぐに進んだら401に入っただね」

地図と名簿を渡される。体の向きを変えようとしたその時、後ろで何かがぶつかった。

「あう、ごめんよ、お兄さん背が高く見えなかったよ」

後ろを振り返ると、小学生みたいな女の子が額を押さええながら立っていた。

「俺こそごめ……」

女の子の目線に合せようと屈んだ時、女の子の目が僅かに、不自然に反射していたそう、まるで、カメラのレンズみたいに反射していたのだ。

『マスター、何時まで立ち止まってるんですか？行きますよ』

突如校舎へと右腕を引つ張られる、視線を前に持つていくと光学迷彩が解けかかっている。パートナーが腕を引つ張っていった。

「痛いから、分かったから、分かったからもう腕を引つ張らないで、じゃあね」

少女の方を振り返ると、そこには

存在していなかった。イヤ、僅かにあの子の足くらいの足跡があった。

右肩に激痛が走ると同時に、足が前に出る。

俺の右腕を引つ張ってパートナー、メアリーは、腕を引つ張る。

『行きましようよ』

メアリーに引つ張られながら、教室に入る。教室には、3人の少年が席に座っていた。

机の上に体を預け寝ている奴がいれば、髪をいじっている奴や何やら数を数えてはぶつぶつ言っている奴がいる。

オレは、辺りを見回し自分の席を見つけた。ちようど、窓から二席目だ。

俺の隣の席に座っている奴に挨拶をしようと声をかけた。

「こんにちは、元氣？オレの名は、古風五十鈴だ、よろしく」

ゆつくりと顔をこちらに向けた。

「……こんにちは、黒塚友哉……よろしく。初対面で済まないが少しお願いしてもいいか？」

何か、食べ物くれ」

黒塚のお腹が小さく鳴った。なるほど、腹がすいているのか、確かメアリーが焼いたクッキーが、靴に入っていたはず。

靴を開けクッキーの袋を取り出す。

メアリーが友達作りにと昨夜焼いてくれたものだ。黒塚に渡すと袋から三枚取り出し食べる。

「お、旨いなこれ、五十鈴が焼いたのか？」

「俺が焼いたわけではないよ。俺の戦闘侍女人形が焼いてくれたんだ」

黒塚から袋を受け取る。

「へー、世話好きないい戦闘侍女人形なんだね」

席に座り、鞆を机に置くと、もう一人の少年と男の教師が教室に入ってくる。

「はいはい、席に座ってくださいって皆座っているね」

担任は、黒板に名前を書く。

『瑠璃川 恭平』と書かれていた。

「私の名前は、瑠璃川恭平。趣味は、釣りです」

先生は、釣りをしているふりをする。

「えー、皆さんは、もう挨拶をすましたと思いますが、もう一度、皆の前で、挨拶をしてくれるでしょうか？廊下側の人からお願いしますね」

「はー」

某戦闘民族のスーパーモードみたいな髪型の少年が立ち上がる。

「遠藤拓哉です……」

遠藤は、困った顔で先生をみる。

「趣味とかを言ってくれるとうれしいですね」

遠藤はしばらく考えてから口を開いた。

「趣味は、オンラインゲームです。よろしく」

オンラインゲームが好きなのか、今度おすすめを教えてくださいおうと。



次に、白髪に中二病全開のコートを着ている少年が立ち上がった。

「彩雲辰人 趣味は…ものを作るのが好きだ。何か質問はあるか？」

ものを作る？何を作るんだろうか？俺はいろいろ考えたが、結論がでなかった。

「質問、そのコートは何ですか？」

ピンク髪のオールバックの少年が質問する。

「これか？これは、リキッドアーマーだよ」

コートのチャックを開けコートの内側を見せた。内側には、信号弾や銃、さらには、人対装甲ナイフがぶら下げられていた。

ここで豆知識 アーマーとは、侍女戦闘での際、流れ弾などに当たって大けがをしないうように着るもので、全身が装甲に覆われたタイプと胴体だけ装甲に覆われたタイプと必要最低限の所しか装甲がないタイプの三種類があるが、彩雲のアーマーだけは、どのタイプにも当てはまらなかった。

俺は、そのアーマーの事が気になり質問した。

「そのアーマー？装甲など見えないですが、どんなタイプなんですか？」

彩雲は、席に戻ると鞆からオレンジ色の物体を取り出した物体はスライムのようにぶにぶにしたつ物体を取り出した。

「瑠璃川先生これを伸ばして持っていてください」

先生は、それを伸ばして前に差し出す。それを確認した彩雲は、コートから銃を抜き銃口を先生に向けたためらいもなく引き金を引いた。

教室中が静かになり、小さな鉄が二つ落ちる音が響き渡る。待てよ？二つだと？

先生の足元に視線を落とすと、そこに発射された弾が赤い煙を上げながら転がっていた。

教室中がざわめきだす。

「これは、ダイラータンシー現象で。波で濡れた砂浜があるだろ？濡れた所をそつと押すと沈むけど強く押したら沈まないだろ？あれを応用した防弾チョキなわけ」

先生が彩雲の頭を叩いて、次の人の紹介をさせる。

「岩本燐です、趣味はギターです」

岩本は、ギターを引いている物真似した。

「何か？質問はないですか？」

俺はとくに無かったので目をつぶって何を言うか考えた。

「特にないようなので終わります」

岩本が椅子に座った音が聞こえる。

よし、俺の番か。立ち上がり目を開ける。

「古風五十鈴です。趣味は……趣味は……」

やばい、何かを考えていたが、まだ決まっていなかった。うあく、皆、早く言えつて目をしてやがる。

とりあえず、何かを言おう。深呼吸をして口を開いた。

「いい天気ですね。連結しませんか？」

俺は何を言っている？頭の中が混乱しだし頭を激しく机に叩きつける。

額が割れ血が垂れてくる。前を見ると、顔を真っ青にいてドン引きしている先生が視界にはいる。

「趣味は、絵を描きます。よく書くのは、整備中の戦闘侍女人形の絵です」

血が足りなくなってきたんだろうか、視界が歪んで見える。そして、一瞬強い浮揚感を感じ床にたたきつけられる感覚と共に俺の意識が遠のいた。

2055年4月5日午前 11時5分 岩本燐視点

重い瞼を起こすと共に電子音が聞こえてくれる。

「ここは、何処だ？」

「<sup>飛</sup>ランディングゾーン<sup>点</sup>の医療テントだ」

足元で、声が聞こえ首を上げるとそこには、辰人が立っていた。

そうだった。俺はあいつらの喧嘩を止めようとしたら意識を失たらしい。

辰人は、俺の元にくると、点滴を交換した。

「もう少し寝とけよ。……ここも相手にバレるかもしれない。運が良くても後50分くらいかな？」

お前が寝ている間、五十鈴らと話しをしたよ。あと35分後、ここを破棄して全軍で敵拠点Aに総攻撃を仕掛ける。それまで十分に休め」

辰人がそう言い残り部屋から出ようとしたが、出口で何かを思い出したように振り返った。

「そうそう、散火の修理に関しては大丈夫だ。安心しろ」

親指を上突き付けて辰人は笑い部屋を出た。さて、もう一度休むか。

---

2055年4月1日 15時41分 黒塚友哉

残り1限で放課後に入ろうとしていた。

窓の外を眺めるも飽きて、教室を見渡す。

今朝のような張りつめた緊張はないが、やはり出逢ってから3時間たつても流石に緊張はしているようだ。

ふと、影が落ちているのに気づき、上を見上げると頭に包帯を巻いたセッチーが立っていた。

「よう、疲れたな」

セッチーはけだるそうに席に座った。

「……そうだな……腹が減ったんだ少しそつとしいてくれ」

「了解」

セッチーは、鞆からメモ帳を取り出し、何やら書き始めた。

僕は、そつと立ち上がりセッチーの後ろに回り込みメモ帳をのぞき込んだ。

「セッチー何を描いている？」

メモ帳には、デッサン絵が描かれていた。どこかの町の風景のような絵だ。

「人のメモ帳を覗くのが趣味なのか？ 拓哉よ。」

後、セッチーって何？」

セッチーは、手を止めず鉛筆を動かしながら話をする。

「連結ってS○△の事だろ？ それを略してさらに最後にチーをつけてセッチー」

連結とは、昼頃の自己紹介で言った言葉だ。

「つたく、やめろよな。それはこつちからしては傷口に塩を塗っている気分だ」

セッチーは手を止め、メモ帳を破り絵を僕に渡してきた。

「あげるよ」

絵を受け取ると共に教師の足音が聞こえてくる。僕は急いで席に座った。

瑠璃川先生が教室に入ってくる。

「えー、この3時限目はですね。この学校は全寮制となっております。」

今から、寮へ案内しますね。今日はもう授業は終わりにしますので荷物は持っていきましよう」

先生に、案内された量にたどり着く。

「ここは、男子と女子別館になっています。くれぐれも女子館には、いかないで下さいなね？特に五十鈴君」

先生はセツチーを睨みつける。セツチーは気まずそうに口笛を吹いた。

僕たちは、寮館内に入りエレベーターに乗り二階に上がった。

コンクリートで作られた廊下を歩く。

「ここが皆さんの部屋です」

何回か曲がったあと、僕たちの部屋にたどり着き、彩雲↓岩本↓僕↓遠藤↓セツチーの順番に入った。

「おおすげー、部屋の中に、個室を設けているのか」

しかし、これ誰が作ったんだ？おい」

彩雲は、本を持って寝ている羊の形をした物凄く可愛い木製の札が吊るされたドアに気づいた。

札には、丸いひらがなで「たつひとのへや」と書かれていた。

なんだろう、女の子の部屋のドアみたいだな。

僕は、自分の部屋を探した。

「ツチ、ここからだと、女子の部屋は見えないのか」

セツチーは、窓から外を見ながら舌打ちをした。僕たちの部屋からは見えず建物の端と非常階段しか見えなかった。

自分の部屋のドアを見つけた。何の変哲もない木製の札に自分の名前が書かれているドアを開き、部屋に入る。

部屋には、勉強机とベッドと戦闘侍女人形の整備水槽が置かれていた。

とりあえず、荷物をベッドの上に放り投げ水槽を覗き込む。

水槽の中では、愛機、シエルフが目を閉じていた。

しばらくシエルフを眺めて、荷物から本を取り出しベッドに寝ころびを開いた。ハンスⅡウルリツヒ・ルーデルの伝記

2055年4月1日 15時45分

自分の部屋を見渡す。壁際に簡素なベッドと机、散火を整備するための水槽みたいなのが部屋の隅に置かれていた。買ってからまだを開封すらしてない散火が入っている

箱が部屋の真ん中に置かれていた。

買ってからは、入学準備などで忙しく開封すらしていなかった。そうだな…今からでも開けようか…やめとくか？ 一人で、開けるのも面倒だし。

ふっと、左腹部の古傷が傷みだしたとたん後ろでドアをロックする音が聞こえた。

「どうした小年？」

後ろを振り返ると、軍服を着た女性がドアにもたれていた。いつの間に入ってきたんだか？

机の引き出しから、姉からもらった対装甲護衛ナイフを出し女性に向けるとそこには、誰もいなかった。

「後ろだよ」

後ろから、ナイフを持つてる方の腕を強く握られ上にあげられる。

「いつの間に後ろに」

後ろに向かつて強く蹴ろうとするが腕をさらに強く握られ腕が鈍い音を立てる。

「つく」

腕に強い痛みが入るが声を上げなかった。

「ほう？少年、この痛みに声を上げないとはな？」

「生憎、俺は、これぐらいの痛みじゃあ声をあげない主義だな。声を上げたら負けだと思



うんだ。だから声をあげなのさ」

それを聞いた彼女は腕を解放した。

「ふん、面白くないな。私達と同じドラックタイプの娘がいると聞いていたがこんな少年がマスターだと……」

彼女は、箱に近づき箱の封を勝手に切った。

「あ、忘れていた」

女性は俺の方を振り返る。

「私の名前は、スカイライナー卯月惨式だ。私のマスターの命令で、散火の開封を手伝えと言われてき」

卯月さんは、俺のほうに手を差し出すが俺は先ほどのことがあるから、少し警戒した。

「安心しろ少年、もう、痛いことはしない、いきなりナイフを向けられない限りはね」

っすつか、それで、さっきはいきなり攻撃して来たのか。

俺は、申し訳ない気持ちになりナイフを引き出しにしまい、卯月の手を握る。

「岩本燐だ。よろしく」

こうして、俺たちは、魔鬼型散火の開封作業をしたのであった。

## 第2話 戦闘侍女人形ってプラモデルみたいに組み立てられないんだ

2055年4月1日 15時55分

岩本燐視点 散火の開封作業を開始して約5分たった。

俺は、まず包み紙やプチプチするあれを取り除く作業まで順調だったが、この次の作業に苦戦していた。

何故かと言うと、腕のパーツを掴み持ち上げるが、パーツが物凄く重く作業は難航していた。

たつく、卯月さんは、いい道具を取ってくるから待っているとか言っていて逃げたし。

このパーツ、糞重たいんだけど

何度も持ち上げようとしたが、1cmも上がらなかった。

「疲れた」

体力の限界を感じ、ベッドに座ると同時に、部屋の扉が開いた。

「待たせたな、だいぶ、苦戦しているようだな。」

卯月さんは何かを押しながら部屋に入ってくる。

それは、小さく畳まれたクレーンみたいなものだった。

「卯月さん、それはなんですか？」

卯月さんは、それを、箱まで運んだ。

「エンジンクレーンだ。車や侍女人形などのエンジンを持ち上げたり、下げたりする時に使うものだ。」

卯月さんは、腕のパーツにチェーン巻きつけフックに引っかけると、ハム（クレーンの腕みたいなあれ）から垂れているチェーンを引く、さつきまで全く動かなかったパーツがチェーンを引くと共に、動いていく。

腕のパーツが箱から出し、残りのパーツも無事、取り出し組み立て作業に入る。

説明書を見ながら両腕を胴体から出ているギアと腕から出ているギアを噛み合わせ、ワイヤーを歯車に巻き、コードを同じ色を接続し、穴にはめる。

同じく両足を同様の作業をする。

「かなり、疲れますね、これ」

額から流れる汗を袖で拭いながら、卯月を見る。

「でも、達成感や愛着が沸くだろう？」

疲れる理由は、簡単、ギアやワイヤーが物凄く固く、力が必要だからだ。

卯月は、箱から頭部を渡し、俺の頭をそつと撫でる。

「そいつは、私にとつては、大切な妹の一人だ。大切に扱え」

卯月は、そつと手を放し、俺に頭部パーツを渡し、再び段ボールの中から何かを取り出そうとする。

俺は、散火の頭部パーツを見つめた。

白くて長い髪は近くで見ると今気づいたが、毛先に進むにつれ薄い赤のグラデーシヨンになっており髪を触ると 髪から甘くて少し焦げたような匂いが鼻をくすぐる。

左右均等に整えられガラス細工のような美しさを顔は、生気がなく冷たかった。

もし、この子が、笑ったらいったいどんな笑顔をするんだろう？ この子の声はどんな感じなんだろうと 想像していると。

「おいおい、いやらしい顔してないで、手を動かせ。少年」

卯月がニヤニヤしながら背中を叩く。

「ちげーよ」

卯月の言葉に顔があつくなり、ついつい声を荒げて反論する。

腕や足と同じようにするのだが、脊髄みたいな 部品と首の中にあるジョイントを接

続する。

その後、ギアやワイヤーとコードを接続し各関節に関節用人工皮膚を巻いて完成した。

「よし、完成したな。となると、後は、初期設定を設定したりするために整備水槽にいれる作業か」卯月さんは、散火を抱きかかえ、部屋の隅にある整備水槽に入れる。水槽に散火をいれ、水槽のコントロールパネルの操作を卯月さんに説明してもらいながら操作

「これが、メインメニューだ。ここでは、プログラム設定や各ジョイントやシリンドーの固さなどを行う設定や装備設定などなどを行うメニューが選択可能だ。勿論、修理とかもできるから、試合が終わった時などに使ってくれ」画面に、それらしい、アイコンがいくつも、表示されている。

「まずは、このマスター設定を開いてくれ」

女の子のシウルエットに、吹き出しみたいなのがついたアイコンをタップする。

メニューに、日付、マスター名前、ウィルスチェック 等などがある。

「とりあえず、この設定をやったら終わりだ」

卯月さんは、そういうと窓際に行き、煙草を吸いだした。

機械が、煙草を吸うなんなんだよ。

2055年4月1日 18時45分 彩雲辰人

ふつと、窓を見ると、夕空が広がっていた。

もうこんな時間か、燐と卯月は、大丈夫なんだろうか？ 部屋を出て、燐の部屋のドアをロツクする。

「燐、辰人だけど、散火の組み立てはどんな？」 扉越しで、燐に話しかけると。

「辰人か？ 助けてくれ！」

燐が悲鳴に近い声が聴こえ、俺は急いで、本来なら校則違反なんだが、もしもの時備えて、コート<sup>①</sup>の裏に吊るしている、対暴走戦闘侍女人形兼信号銃香里4式を抜きながら、ドアを蹴り破る。

「何が、あつた!？」

銃を部屋の真ん中に向けると、部屋の隅で、上半身裸で尻もちをついている燐と、ナイフとナノマシンコーンバーターを持った散火が卯月に取り押さえられた。

状況から見ると、かなり物騒だが、この業界だと、別に珍しい事ではなかった。

散火、卯月等のドラックタイプを操作するにあたって、ナノマシンコーンバーターを体内に移植しなければならぬ。しかし、たまに、燐みたいな体内に機械を入れるのに恐怖を覚える人が一部居る。

まあ、ドラックモードになった際、ナノマシンのおかげで、侍女人形と意識がリンク

することが出来るんだけど、その際、血管の耐圧数値ギリギリで全身を駆け巡るのだ。

今時、あまり耳に入ってこなくなったが、昔は、脳の毛官が切れて、死んだ人もいる。

まあ、ナノマシンコーンバーターも大型で、義手や義足や義眼などに置き換える、それが当たり前だったが、今は小さくなり、脳の血管が切れることはなくなった、さらに、コーンバーター自体小型になって、体への負担がなくなったのだ。

しかし、怖がる人もいる。しょうがない、これも俺の仕事のうちだ。  
銃をしまししながら、燐に近づき、

「燐、どうした？ドラックタイプについては、卯月から話を聞いてないんか？」燐は、少し顎を横に動かす。

「まあな、ある程度は効いていたが、まさかいきなりとは思わなくてな、それに、いきなり機械に手術されのもあれだし」

「なら、俺が、やろうよう。卯月、そいつからナイフとコーンバーターをとりあげろ」

卯月は、散火に足を引っかけかけて転ばして、ナイフとコーンバーターを取り上げ俺に渡す。

卯月よ、もうちょっと、いい方法があるだろ？それを受け取り、作業の邪魔になるの

で、コートを脱ぐ。

「辰人：お前それ、どうした？」 燐の目線が俺の右腕 に注がれていた。

「これか？お前がいまからつける奴の昔のモデルだよ。彩雲工房 製

D T D 特殊義手三型だ」

チタンで出来た右腕の義手を見せると、指が縦に引き裂かれたように分裂した。

「俺の腕もこんな感じなるのか？」 燐は、不安な顔をこちらに向けて。

「義手とかじゃない、これを体内に入れて血管と接続するんだ、作業としては、5分で終わる。痛みは、男なら我慢しろ」 俺は、指を元に戻すと、ちよつと 強引に燐の右腕を取った。

「右肩に埋めるけどいいか？ほかの所でもいいが」

「いや、そうしてくれ」 燐は、半ばやけくそに言った。

卯月に、医療箱を持ってきてもらい、麻酔薬を、注射にいれ、燐の肩に注射する。

右腕ゴム製のひもを結び血液の流れを遅くする。

そして、ナイフで素早く、動脈と静脈を切り、コーンバターの人工血管と接続し卯月が持ってきた医療用糸で結んだところで、燐の 顔が傷みで歪んだ。

「っ痛、辰人、凄いい傷んだが」

「漢だったら、そのぐらい我慢しろ」 俺は燐が痛みを訴えるのを 無視して、骨を出そう



とする。

くちゅうくちゅうと肉 が混ざり合い切れる音が、部屋に響きわたる。

「なんだ？これは？」

筋肉に切り込みを入れ少し骨を少し露出せると、そこには窪みがあった。

しかも、自然で出来た窪みではなかった、ドリルで、削ったようなそんな窪みだった。

俺の経験の中でこの様な窪み が出来るのは、一っだけ心当たりがあった

「燐、昔、ドラックタイプの戦闘侍女人形を操って いたのか？」

「ああ、せつちゃん接近戦型 type1って言う侍女人形だ。

第二種だけどまった く、昔、コンバーターを入れる手術をしたことがあったが、こんなやり方じゃあなかったはずだ」燐は何処か、遠くを 見つめる目で卯月を見ていた。が、しだいに燐の表情は、何処か苦しそうに歪んでいた。

あまりこの話ほしないういよう。

「お生憎、ここは病院じゃやないからな、まあ、こんなところでやるのも乙なものだ」

せつかくの窪みだ、少しナイフで削り、コンバーターを嵌め て糸で肉を縫い合わせる。

「散火、仕上げを頼む」散火は、こくりとうなづくと燐の方に触れる。

「ああうう!!」肩に触れた手が赤く光出し、部屋に肉が焼ける臭いがする。

「ちよ、あまり変な声をだすなよ、変な噂が流れるのは、嫌だからな」

俺は、燐に背を向け、ナイフに付着した、血をハンカチで、拭き取り、散火に渡し、自室の冷蔵庫にコーラーがあるのを思い出し、自室に戻った。

2055年4月1日 18時55分 岩本燐

辰人が、お盆にコーラーとコップを持ってきて俺に渡す。

大丈夫

「燐、右腕の具合は、しゃーないか？」

右肩を見ると、半透明の緑色のジェルが塗られておりその下の縫い傷は見えないが、焼印が押されていた。だ

「痛みもだいぶ収まった、肩も問題なく動かせるけど、なんだ？この焼印は？後、よかつたらお代わりくれる？」コップを差し出し、辰人に渡す。

「それは、最近、コーンバーターの部分に自分の侍女人形のイメージした焼印をするのが流行ってな、だから、入れておいた、けど安心しな、そのせいで、銭湯とか入れなくなるわけじゃあないからな」

辰人は笑顔で、コーラーをコップに入れ、段ボールの中から、10CMくらいの短刀

を取り出す。

「これは、ドールコントローラ鬼封だ、これで、散火のプログラムパターンを変更、通信、そして、ナノマシンコーンバーター機動 キーだよ」短刀とコップを受け取る。短刀は、コバルトブルーの鞆に金の飾りがついており、鞆尻に、焼印と同じ模様が彫られていた。

柄には、いくつかのボタンがついており、それを、握ると、細かな駆動音と振動がした。

「これで、どう動かせばいいのだ？」辰人は、無言で、右腕にナイフで切り付ける動作をした。

「つて、まさか？」背中汗が噴き出る。

散火を操作するには、右腕を鬼封で切り付けるだと、そんなことをしたら痛いじゃないか

昔、せつちゃんていう、戦闘侍女人形を持っていたが、あれは、スマホみたいなので操作していたが、切り付けるってどうなん。

「マジで？」辰人は、自分のコップにコーラーを入れ、一気に飲み干し、答える。

「マジだ。どうした、自分の腕を切りつけるのが怖いウゲ ップ？安心しろ、今のお前にはナノマシンが体に入っているだろ？」

そのナノマシンは、ドラックモード時、サポートしたり通常時は身体能力上昇したりするんだ」

「そ、そうか」こいつ、ゲップしながらしゃべったぞ。

「まあ、俺の口で話すより、こいつから色々話を聞いたほうがいいだろうって」

辰人は、自分のコップとお盆を持って部屋を出ていき、卯月も続くように部屋を出て行った。

ぬるくなったコーラーを一気に飲み干し、立ち上がろうとしたが、足が痺れてうまくバランスが取れず、倒れ……なかった。

散火が肩を掴んで体を支えてくれた。お蔭で、倒れずにすんだようだ。

「大丈夫ですか？ マスター」

「大丈夫だよ、ありがとう。散火、ベッドに座りたいんだが、肩を貸してくれ」かすかに散火の駆動音が響き俺の手を首に回す。

「了解しました」散火に体重を預け、ベッドまで運んで貰い俺は、そのまま横になった。

「散火、少し眠る。7時 半になったら起こしてくれ」

瞼が降りかけている視界の中で散火は、首を振り整備水槽の中に入っていく姿が見えた。

そして、視界が薄暗くなっていった。

そうとう疲れていたのか、眠りに入るにそうと時間がかからなかった ようだ。

2055年4月1日 18時59分 ???

「散火ノ起動ヲ感知、人格 プログラムヲ送信要請ヲ受信」

「了解シタ、人格プログラム送信、ソレニ伴い、スカイライナー システムに接続をします」

「システムの接続を確認したわ、式式まずは、人格プログラムを送信して、壱式は、思考プログラムの交換を、私は、スカイライナーシステムの戦術データとリンクさせるわ」

何処からか駆動音が響きわたる部屋の中、玉座のような椅子にいくつものコード繋がった少女が座り誰かと話していた。

2055年4月1日19時29分 岩本燐

とても、懐かしい夢を見た。

俺が小学生だった頃の夢だ。

俺の家は、父と母と姉貴と俺の四大家族だ った、しかし、両親とは、共働きをしており、姉は、部活などで帰りが遅く、いつも、家に帰ると一人だった。

たまに家族皆で集まる日もあったが、たいては、俺一人か姉貴と二人だけだった、当時の俺は、寂しいとか悲しいとか思わず、「仕方がない」と自分に言い聞かせ毎日を過ごしていた。

学校にいったら、皆、家族の話したりを笑ったり、泣いたりしていた。

「ねえ？ 燐ちゃんつて家族と一緒に、遊びに行かないの？」

「ねえ？ 燐ちゃんの家族つてどんな人？」

「よし 今日、作文を書いてもらうぞ。テーマは、家族だ」

俺にとつて、家族とは、居ても、居なくてもどうでもいい そんな存在だ。

だから、こんな質問をされると、いつも逃げていた。

そして、いつだったかは忘れたが、俺は、家族という言葉が嫌いになった。

そんなある日、10歳の誕生日に、姉貴が新しい家族を連れてきた。

「燐坊、今日で10歳だな。お誕生日おめでとう」姉貴が誕生日プレゼントを連れてきたんだ。

それは、高校生になった今でも、覚えているほど出来事だった。

突如、姉貴と俺がいる部屋の入口で、小さな破裂音が響いた。

「お誕生おめでとうございます。マスター」入口に、女性がクラツカーを鳴らして立っていた。

「今日からお前の侍女人形だ。正式名はセントリィ・ナージャン。近接型、個体名は、まだ登録してないだから、燐坊が決める。」姉貴から端末を渡される。

「姉貴、これは？」

姉貴から渡されたのは、大昔の携帯端末、スマホ だっけ？ それによく似た形をした端末だった。

「それは、ドールコントローラだ」姉貴は、コントローラを開いて、設定メニューを開き、俺に渡した。

名前登録と書かれたボタンを押し、名前を考える。

「姉貴、どんな名前がいいなあ？」

「私に聞くなよ、お前が付けたい名前でもいい だ」俺は、その時、色んな名前が浮かんだが、どれもパットしなかった。「うーん」よし、これにしよう。

「ナナ、今日から、お前の名前は、ナナだ」

俺は、勢いよくコントローラの決定ボタンを押しした

「…マ…」

「マスター…」

「マスター起きてください…」

散火の声で目を覚まし、目を開けると散火がベットの横に立って、俺の体を揺らしていた。

身体を揺らすために、前屈みになっているせいで、着物の隙間から、桃源郷の片鱗が見え隠れして、俺は目のやり場に困り布団の中に潜りこんだ。

「ちよ、マスターを起きてくださいよ」散火は、そんな俺の気持ちも知らずに布団をまくり上げ。

したが無い、起きよう。

「はい、はい、今起きるから」

身体を起こして、ベッドから出て時間を見ると、ちようど、7時30分だった。

「散火、起こしてくれてありがとうな、俺は、これから、食堂で飯でも来るから」

俺は、散火にそういう部屋を後にした。

部屋を出ると、ちようど、同じく部屋から出てきた古風に出会った。

「よう…飯か？」古風が、片手を上げて挨拶をする。

「ああ、そうするつもりだ。一緒に行く？」

せっかくの友達を増やすチャンスだ、一緒に食事を誘った。



2055年4月1日 19時時35分 古風五十鈴

岩本に誘われて、食堂にやってきた。

「これは…すごいな」

食堂に入ってみると、入り口には、食券販売機とメニューが描かれた看板が設置され、そこから奥に進むと、厨房がある。

イメージ的に、ショッピンセンターのフードコート に近い感じだろう。

俺たちは、とりあえず食券販売機の前に立った。

「うむ、丸松牧場産島根和牛ステーキが、最も高いようだな」

「どれどれ、うあ、高校生が手を出す額じゃないだらこれ」

そのお値段、なんと5000円もする。

でも、それ以外に、よくよく、見たら高いお値段料理が幾つか並んでいた。

「岩本、お前は、どうする？」岩本は、少し考えて、幾つかのボタンを指でさして小さな声で。

「どれにしようかな？」とつぶやいた。

「よし、俺は、イカ祭り定食 にしたよ」岩本は、お金を投入口に入れボタンを押す。

「古風は？」岩本は、食券を取りながら聞いてくる。俺は、少し迷った後、口を開いた。

「チキン南蛮定食だ」そして、食券を買った。

俺たちは、そのまま厨房にいる女性に食券とブザーを交換してもらい、食堂中央付近の席を陣取り、たわいない会話を始めた。

「なに？お前の侍女人形って今日、初めて起動したのか？」

俺の声が大きく食堂に響いた気がしたが、幸い周りの声でかき消されたようだ。

「ああ、なんか、辰人曰く、登録などの書類提出や小細工に時間が掛かかるから、まだ試合には出せられないらしい」岩本は、声を潜めていった。

小細工だと、いったいこいつの侍女人形はどんな奴なのか？

そもそも、あの辰人の奴も怪しいし、15歳で、お店を持つていて何者だ？

しばらく、燐の侍女人形と辰人について考えていると、ブザーが鳴った。

「おお、出来たか、燐、お前の分も取ってくるよ」俺は、そう言い残し、席を立ち上がった。

「そうか、ありがとう」燐は、両手を合わせて礼を言った。

俺は、厨房に向かった、厨房前にいい具合に混んで料理を受け取るのに

3分待たされた。

「随分、遅かったじゃないか？」

「ああ、だいぶこんでてな」隣の前に、チキン南蛮定食を置き、席に座る。

イカ祭り定食は、その名の通りに、大量のイカを豪快に一匹使った定食だ。その内容がイカそうめんを始め、イカの煮しめ、イカ飯、イカの中から揚げ、ゲソとイカリングのサラダ、イカの耳の酢物、イカ入り味噌汁とイカ祭りである。

「なんか、物凄く凄いな、イカの量といい、鮮度といい、それに比べて俺のメニューは」

俺のメニューは、メインのチキン南蛮と小松菜のお浸し、千切りキャベツ、なめこの味噌汁、白米となかなかうまそうなもんだ。

チキン南蛮を一口食べてみると、口の中で、酢と味噌の風味が広がる。

旨い、これは、旨い。

千切りキャベツも食べる。

口の中で、シャキシャキといい音とともに、キャベツ特有の甘さが口の中に残った南蛮の味をさらに引き立てる。

今度は、チキン南蛮も一緒に、食べてみると。

ふおおおおお、こいつは、最高だ。

キャベツの食感がいい、足りなかった、チキン南蛮の歯ごたえを、補い、キャベツの甘さと味噌の旨みが鶏肉の味を引き立てる。

しかも、鶏肉が柔らかい、マシユマロみたいに柔らかくて、口の中で溶ける。ご飯が止まらない。

「随分、旨そうな顔をするんだな」

「顔に出ていたか」燐は、こくりとうなずいた。

「分かりやすいくらいに、しかし、旨い なこれは」その後、俺たちは、料理に夢中で無言で食べて、部屋に戻った。

2055年4月1日22時45分 古風五十鈴

「ただいま、メアリー」

シャワールームでシャワーを浴び、リビングでテレビを見て、自室に戻ると、そこには、ブルーシートを広げ、その上に、分解された、スナイパーライフルの部品を磨くメアリーの姿があった。

「おかえりなさい、マスター」

メアリーは、こちらを向かず、ライフルの部品を磨きながら、話しかけてきた。

「マスター、今度の休みに、グリスを買ってくれませんか？」

メアリーは、空っぽになったグリスの缶をこちらに渡す。

「もう、なくなっただんか、分かった、今度買っとくよ。」

缶を机の上に置き、メモを取り出して、今週の日曜日に買い物と書くと欠伸が出た・

「ふおお、眠い、メアリー、電気を消してもいいか？」

「電気は、もう少しつけていてください」

メアリーは、ライフルの部品を組み立て始める。

俺は、ベッドに入って、しばらくすると、俺は、眠りに入った。

### 第3話誰がクラス委員長になったてどうでも良くね

2055年4月2日午前3時56分 彩雲辰人

朝の四時前に起きて服を着替え、部屋を出て皆を起こさないように忍び足でリビングを出て、トレーニングルームに入ってしまった。

「よし、今日も頑張るぞい」

五十年近くの死語をつぶやく。

部屋の電気は灯さずに、部屋の奥に設置されたリングに上がると、暗闇から模造刀とヘッドギアが飛んでくるのを、片手で受け止めた。

「おはようございます、しんちゃん」

暗闇から和風メイドドレスに身を包み、腰に左右に三本ずつ携えている少女が姿を現した。

「おはよう、臯月……ふぁ」

俺は、ヘッドギアを装着しながら、挨拶をする。

「あら、まだ、眠たいようですね」

臯月が、左足を後ろに引いた瞬間、俺の勤が警告アラートを伝える。

俺は、素早く、右腕を前にかまえる共に、金属と金属がぶつかり合う音と共に、両手に重い振動が伝わる。

皐月の剣技の一つ、『シマヘビ』、皐月の背中に、正面から見えない位置に隠している刀を左足で抜き、そのまま、蹴り上げるように相手を切り裂く技だ。

皐月は、足指に挟んでいる刀を、天井に向かって切り裂く。

俺は、横に飛び、素早く斬撃を躲し反撃をする。皐月のがら空きになったうなじを蹴る。

すると、皐月は、ぐらつき、刀を落とした。俺は、その刀を拾い、さらに追撃をする。が、皐月は僅かに、体の向きを変えたり、屈んだり、身体を反らしたりして躲す。

ツチ、回復が早すぎる。

俺は、一旦、距離を置こうと下がるとした。

「脇腹が無防備ですよ」

皐月の両腕が消えたかと思うと、脇腹に痛みを感じた。

「はい、死んだ。今のは距離を置こうとして一瞬、止まったね、残念」

俺の体が持ち上がり6本の刀が両脇腹に食い込み拘束された、皐月は、強く食い込ませたり弱くしたりして、俺の体力を奪っていく。

「さて、辰人、そろそろ本気で行かせてもらおうわ」

皐月は、低いトーンで言うのと、拘束を解くと共に、俺の身体が、落下する。

「っふん」

皐月は、そんな俺の腹部に蹴りを入れる俺はそのまま飛ばされ、何回かバウンドして床に転がった

「ツかは」

蹴りが鳩尾に入ったらしく、上手く呼吸ができない。

「人間相手…ヤマカガシ…卑怯すぎ…るだろ」

皐月は、右手の刀を担ぎ、左腕をだらんと垂らす。

「おかげで、目が覚めてでしよう？」

「つたく、そうだな」

さてと、本気で、行くとしようかな？

2055年4月2日午前 5時30分 古風五十鈴

俺の朝は、物凄く早い。

ドールブレイクゾーンに必要なのは、体力だ。

最低10Kmにも及ぶフィールドを、走らなければいけないからだ。

俺は、寝ている皆を起こさないように、自室を出て、トレーニングルームに向かった。



「お、おはよう」

電気がついていないが朝日が差し込み、明るい部屋に入った瞬間、声をかけられる。入口近くの壁で、片腕逆立ちをしながら腕立て伏せをしている彩雲の姿があった。

「おはよう」

俺は、鏡の前にあるルームランナーに乗り、走り出す。

部屋に、ルームランナーの駆動音と彩雲のカウントする声が響き渡る。

「95…97…98…99…100…ふう…終わった」

辰人は、前に倒れるように起き上がりルームランナーに乗る。

お？これは、親睦を深めるチャンスじゃないか？

15分くらいの沈黙が流れた。

「今日の時間割はなんだっけ？」

俺は、辰人に適当な話題を振ってみた。

「朝の自由時間なしE.L国ドドドだ、」

「そうか、サンキュ」

お礼を言った瞬間、電子音が鳴り響く。

「お、時間か、じゃあな、五十鈴」

辰人そう言い残し、トイレニングルームを去っていった。

「もっと、話をしたかったのに」

しばらく、走った後、助木を使って懸垂を始めた。

4月2日午前 7時10分 古風五十鈴

懸垂も終わり残りのトレーニングを澄まして、リビングでテレビをつける。

『山陰地方の今日の天気です。益田市…晴れ、浜田…晴れ、江津市…晴れ——』

今日の天気は、晴れか、花粉がやれんな

「よう、おはよう」

「一緒に飯を食いに行かないか？」

後ろから、遠藤と黒塚が声をかけてくる。

「おはよう、ご飯か、俺も一緒に行かせてもらってもいいか？」

せつかくだし、皆で行かないか？」

辰人が洗面所から顔を覗かせて挨拶をしてくる。

「お、いいぜ、とすると…岩本を起きるのを待つとするか」

俺は、再びテレビに視線を戻すと、新開発された戦闘侍女人形のニュースが流れていた。

『侍魂から新たにハイエンドモデルの織田信長の販売が発表されました。』

森山さん、戦闘侍女人形とはなんなんでしょう？私、初めて聞いた名前なのですが』

映像が女子アナから少し太ったおっさんに切り替わる。

『えー、戦闘侍女人形とは、簡単に説明しますとね。宇宙放射線の中から見つかった原子コスモグラノを動力としたアンドロイドで、人々の生活の支援などをしているのが、侍女人形と言います。それらを用いたスポーツ、ドールブレイクゾーンとドールゲームの二種類に出場するために作られたのが戦闘侍女人形と言います』

再び、女子アナに映像が切り替わる。

『分かりました、では、こちらのVTRをご覧ください』  
すると、どこかの演習場が映し出される。

『えーあちらにあるのが、今回新しく発表された織田信長です。』

カメラに映し出された織田信長は、腰まで長い黒髪の細身、雪みたいな肌、顔は前髪で隠れていて見えない。

だが、それよりも気になる事があった。手足に拘束器具をさせられ足枷までされ、さらには首元に、ギロチンに見える拘束器具まで嵌められていた。

「なあ、彩雲。なんで、アイツには、拘束器具がされている？しかも、ギロチンみたいなものまであるし」

洗面所から出てきた彩雲は、一面倒くさそうに答える。

「あれか？ 開発途中の戦闘侍女人形は、あんな感じで拘束するよう決まりがあつてな。

もし、AIのプログラムに欠陥がありそれが原因で、暴走してもすぐに鎮圧できるようになっていているんだ。これは、俺たちにも関係してくるんだが戦闘侍女人形の弱点は、頭とエンジン部位、そして首だ。特に首は、AIからの命令を伝えるためのコードや各モジュールを冷却する人工血管なんかが通っている。

つまり、ギロチンで、首を落とすのが安全なんだ」

なるほどねえ、俺は彩雲の説明を聞きながら、テレビに映し出されているスペックを見ながら、頭部の装甲厚を計算していた。

「お、おはよう」

後ろを振り返ると、眠たそうに頭を前後にふる岩本の姿があった。

「よう、おはよう」

「やった、起きたか、飯食いに行かないか？」

「おっはー」

皆で、挨拶をし共に食堂へ向かったのであった。

2055年4月2日 午前 7時25分 岩本燐

「彩雲は、なにするんだ？俺はC」

ショーケースに入ったレプリカを見ながら、彩雲は、何にするのか尋ねる。

「俺は、モーニングプレートBだ、古風は？」

彩雲は、二段目にある、プレートを指さしながら古風に聞く。

「俺も同じ奴だ、黒塚は？」

「僕は、Aだね。拓哉は、何にする？」

「俺は、Cだ」

それぞれ、食堂の前にあるレプリカの前でメニューを決める。

そして、俺たちは、食券を買って、おぼちゃんに渡し、食堂中央にあるテーブルに陣取った。

「そういえば、さっきのニュースでよ、新開発された、侍女人形のスペックってマジなのか？」

「違うだろ、たとえ、報道されても、改ざんされた数値しか言わないだろう」

辰人は、スマホを操作しながら、答える。

「だけど、WDBのライブラリーを開けばあるはずだ」

辰人は、携帯を見えると、そこには、何千もの名前や数字が表示されていた。

「これは…ポケ○ン図鑑か？」

遠藤の頭には、どうやら、50年前から続いているアニメやゲームに出てくるあの図鑑にしか見えないようだ、てか、そういう、言われるとポケ○ン図鑑しか見えない。

「はは、これは、戦闘侍女人形装甲スペック辞典だ、WDBに登録されている、すべての戦闘侍女人形のスペックが乗せられている。

けど、開発途中だったり、個人専用で作られた戦闘侍女人形だったり一部の情報は凍結されている」

辰人は、スマホのキーボードを叩くと、織田信長の情報をリサーチし始める。

「つち」

辰人は、検索結果を見て下打ちをした。

「該当する戦闘侍女人形はありませんだつてよ」

俺たちの周りに、暗い空気が流れる。

『P p p p p』

突然、電子音が鳴り響き、俺たちの朝食が出来たことを知らせ、俺たちは、それぞれ、受け取りに行くのだが、もうこの時には、俺たちの頭の中には、織田信長に事は、もう忘れていた。

俺たちは、注文した料理を受け取り、再び席に座った。

俺のCプレートは、ハンバーグと目玉焼きと食パン後、レタスのサラダだ。

彩雲のBプレートは、色んな種類のサンドイッチが山積みになっていた。

す、すごい量のサンドイッチだな

Aプレートを頼んだ、黒塚はと言うと、それは、ライ麦パン？丸いパンとバターとレタスとハンバーグだった。

たぶん、「ライ麦パンには喜んで食べる」ってことかな？

俺たちは、その後、くだらない話をしながら朝食を食べるのであった。

2055年4月2日 午前9時15分 古風五十鈴

「今日は、このクラスの委員長を決めます」

401教室に、瑠璃川先生の声が響きわたる。

「我こそは、って言いたいかもしれないかもしれませんが、この学校での、委員長決めは、少し変わったやり方をします。皆さん、自分の戦闘侍女人形を連れて、私について来てください」

俺たちは、教室を出て、しばらく廊下を進んだ先に、分厚い鉄板で出来た扉があった。

「メアリーこれは？」

俺は、小声で、メアリーに話かける。

「チタン製の鉄扉だと思います」

先生は、レバードアノブを引くとともに、機械音と空気が鳴り響く。

扉の中には、エスカレーターが設置されており、地下へと繋がっていた。

「なるほど、地下に演習場があるのか、先生、演習場から地上は地下何Mですか？」

「皆さん、エスカレーターに乗ってください、彩雲くん、地下10です」

辰人は、それを聞くと、ぶつぶつ何か言い始めた。

「…スカイライナーシステムが安定して電波を受信できるな」

スカイライナーシステム？ 何だろうそれは？

「彩雲、スカイライナーシステムってなんだよ？」

俺は、彩雲に問いかけると。

「俺の彼女の置き土産の一つだ」

たった一言しか変えてこなかった。

その後、俺たちは、無言のまま、地下におりた。

「では、皆さん、こちらに」

再び先生に連れられ扉の前に立たせられる。

「皆さんの戦闘侍女人形は、私が預かります。」

は、こちらの部屋で着替えてください」

メアリー達は、先生と一緒に廊下の奥へ進もうとした時、俺は、ありえないものを見た。

メアリーの後ろに、空気が屈折して、4、5人の人影を作っていた。

「セッチー、早く入ろう」



背中を叩かれ、後ろを振り返ると、黒塚が立っていた。

「ああ、早く着替えなければいけないしな」

部屋に入ると、何故か、全裸の岩本の姿があった。

「つちよ、なんで、お前全裸なん？」

岩本は、こちらを向くと、笑いながらこう言い放った。

「運動すると、汗かくだろう？ パンツなどが、蒸れて気持ち悪いだ」

「そ、そうか」

俺は、荷物からスーツを取り出す。

「へー、セッチーはなんかロボットアニメのパイロットスーツみたいだね」

黒塚が、横で着替え始める。

「そうか？ 俺は、スニーキングスーツに見えるんだが」

腰まで、スーツを穿きおえ、黒塚の方を見てみると。

「…お前は、今から戦闘機に乗るのか？」

緑のパイロットスーツに、灰色のヘルメットを身に着けた黒塚がいた。

「あながち、間違つてない、俺は、先に行くよ」

黒塚は、そのまま、もう着替え終わっている彩雲とともに、部屋の奥にある扉へ向かった。

おれは、一気に、スーツを上半身に通し、装備が入っている鞆を腰付け扉に向かった。

そこは、荒野が広がっていた。

かすかに、水のせせらぎが聞こえてくる。

「こいつは、すげえ」

隣に、岩本と遠藤がやってくる。

「ここで戦うのか」

彩雲と黒塚もやってくる。

「皆さん、集まりましたね」

先生が人数確認しながらやってくる。

「今日は、ここで戦ってもらいます。ルールは、1対1、相手を大破させた人が勝ちです。

そして、一番強い人が委員長になります」

なるほど、つまり互いを潰し合い残った人が委員長になるのか。

「では、はじめにやる人は、誰ですか？」

「俺がやる」

俺と黒塚が二人同時に手を上げる。お、ハモった。

「なるほど、黒塚くん、信号拳銃をここから北に行き、谷を降りて、真つすぐ行くと、こ

「こと同じような場所があるから、そこで、準備完了したら、撃つてくれ」

黒塚は、ホルスターを受け取り、腰に吊るす。

「では、準備してきます」

そう言い残し、黒塚は、俺たちと離れていった。

さて、戦闘準備をしなくちやな。

## 第4話ラ・モルトつてフランス語で、死神つて意味なんだけ

2055年4月2日 午前9時15分 古風五十鈴

「メアリー、装備の確認をするぞ」

「分かりました」

何処からか、銀髪を靡かせながら、黒いゴシックドレスを纏う女性が姿を現す。

メアリーは、肩にぶら下げている、長方形のケースを開ける。

ケースから、大型スナイパーライフル「可変型分隊支援狙撃ラ・モルト」、スコープ、三脚を取り出し組み立てを始める。

それに対して俺は、リュックから、観測器を取り出し、電源を入れる。

「先生、試射してもいいですか?」

先生は、こくりと頷いた。

俺はスコープを覗く、スコープの真ん中に黒い十字とミルが刻まれている。

これは、俺が見ているエイムだ。

観測器の操作パネルにあるレバースイッチを倒すと、俺の十字からかなりズレタ所に

青い十字が表示される。

これは、メアリーのエイムだ。

次に、スイッチを上から下に下すと、スコープ左端に表示された、a u t o の文字が M A N U A L に変わる。

すると、青い十字と黒い十字が重なる、これは、俺が見ている物にメアリーが銃口を向けていることを指す。

「すうー」

俺は、15M離れたところにある、岩にエイムを向け、深呼吸をする。

「撃て」

俺は、メアリーに射撃命令を下す。

バドオオオン

腹にボディークローを食らったような音が響き、岩が砕ける。

「目標に命中、次弾装填、待て」

俺はスコープから顔を離す。

最期に、リユックから、鳥型のロボットを取り出す。

「マスター、ヤキトリも使うのですか？」

射撃体勢から通常体勢になったメアリーが首を傾げる。

「ああ、そうだ」

ヤキトリを肩に乗せたその時。

ペアアン

遠くの方で、水色の煙が見えた。

「よし、どんな、可愛い子ちゃんか見に行くか」

俺とメアリーは、右手に、見える高台を目指し走り出した。

---

2055年4月2日 午前9時25分 黒塚 友哉

「たつく、なんで、こんなにもあるかなければいけないんだし」

俺は、くたくたになりながら、シエルフの元にたどり着いた。

「ドリンクデース」

俺は、くたくたになり、地面に寝そべっていると、頬に冷たい容器が当たった。

「ありがとう、シエルフ」

シエルフから水筒を受け取り、水分を摂取する。

スポーツドリンクを飲みながら、シエルフを見る。

俺と同じ、パイロットスーツを身に包み、緑髪のショートカットが特徴の戦闘侍女人

形だ。

「シエルフ、猫は、何処だ？」

「その草むらに偽装させてマス」

「よし、出撃準備だ」

俺は、足元にある、シートを掴みとり引き上げると、草むらが崩れ、銀色の戦闘機が姿を現す。

コックピットに乗り込み、スロットルレバーを目の前の穴に入れる。

「シエルフ、メインエンジン接続」

後ろの席で、ガコツとエンジンとシエルフが接続された音が響く。

「エンジンスタート」

エンジンスタートボタンを押す。

しばらくすると、駆動音が鳴りだす。

「ハッチ閉鎖」

シエルフが、ハッチを閉める。

「各モジュール起動」

様々な機器に電気が灯りだす。

「コスモグラノ、分裂開始」

「了解、翼の開閉テストを開始」

俺は、窓を覗き、主翼がまるで、両手を広げるように展開しているか確認する。

「all green」

「各モジュールテスト終了、all green」

シエルフが異常を無いことを確認する。

「操縦をシエルフに渡す、you have control」

「I have control これより、垂直離陸を開始しマース。マスター、ah

you ready?」

あ、信号弾を忘れていた。

俺は、手信号用の窓を開け、信号銃を出す。

「信号弾を撃つタイミングで離陸を開始して」

シエルフは、俺の肩にそっと手を置いた。

シエルフが、手を置くときは、「落ち着いて」の意味だ。

俺は、一旦、深く息を吐き、深く吸い込んだ。

「さて、行くか」

そして、俺は、トリガーを引いた。

それと同時に、発進高度まで上昇が始まる。

「マスター、これからどうしマース？」



シエルフが、進路を聞いてくる。

「まずは、中央にある森林に向かい、爆撃を仕掛ける、気化爆弾装填」  
足元が微かに揺れる。それは気化爆弾が装填されている揺れだ。

「発進高度到達、カウント5秒前」

「全兵装オンライン。火器管制への接続を確認」

全ての兵装の安全装置を外し、ヘルメットのバイザーを下げる。

「4秒前」

目の前にHUDが表示され、各兵装の残弾や射程などの情報が映し出される。

「3秒前…2秒前」

キユイイイ

メインスラスタールからアフターバーナーが徐々に出始める。

「1秒…発進！」

ドンつと、凄まじい重力が前から後ろへと引っ張られた。

2055年4月2日 午前9時30分 古風 五十鈴

俺たち、二人は、高台を目指して進軍をしていた。

「メアリー、この坂を登り次第、狙撃ポイントを作るぞ」

坂を全速力で駆け上がりながらメアリーに指示を出す。

よし、後、少しで、坂を登り切る。

微かだが、川のせせらぎが聞こえてきた。

「メアリー、この先、川があるようだ、その辺りに狙撃ポイントを作らないか？」

俺は、メアリーの狙撃ポイントをどこに作るか、聞いてみた。

メアリーは、首を横に振る。

「河川敷は、開けている可能性があるんで、やめた方がいいかと」

そうなのか、だったら、このまま進軍するしかないな。

坂を登り切り、背の高い草むらの中へ進軍しようとしたその時、

「マスター！」

急に、メアリーが後ろから抱き付俺を押し倒す。

「な、何を——」

風切音とともに、一機に戦闘機が横切っていった。

「メアリー、狙撃準備だ」

急いで、観測器を設置し、土嚢に土を入れ、積み重ねその上から、偽装ネットを張る。

メアリーは、黒い傘を広げ地面に突き刺す、傘の膜が濃ゆい緑に変わり、周りの草と

同じ色になる。

「よし、狙撃ポイントの設営完了」

メアリーは、急いで、ラ・モルトの銃口を出すための穴にライフルを構え、その隣に観測器を置き、戦闘機を捉える。

「さて、見せて貰おうか、お前の戦闘侍女人形の性能とやらを」

俺は、深呼吸をする。

「AP装填…撃てっ!!」

バドオオオン

銃口から煙を上げるなか、メアリーはボルトを引き、次弾を薬室に送る。

「ヒット、敵モジュール破壊を確認。

あれはっ、メアリー、コックピットは撃つな！ 前席に黒塚が乗っている注意しろ…

撃て」

再び、ライフルが火を噴く。

「ミスヒット…これ以上撃ったら、こちらの場所がバレってしまう、待機しろ」

「了解」

メアリーはラ・モレから弾倉を抜き、安全装置をつける。

「マスター、これからどうします?」

「そうだな、や——」

俺のすぐ後ろの土嚢に弾が突き刺さる音が雨のように鳴り響いた

2055年4月2日 午前9時25分 黒塚 友哉

「リーダーが破壊されてしまったね」

「まさか、いきなりリーダーがやられるとはね」

コックピットの前部に、拳くらの穴が開いていた。

俺は、目視で索敵を始めるーが共に、背筋に冷たい水を掛けられたような感覚が走つた。

「シエルフ、急いで、ハイGターンをしろ、方向か任せる。ストールを起こせ」

シエルフは、スロットを全開にして旋回をする。

機首を中心に旋回をはじめぬ。

『ストール』

すると、先まで、尾翼があつた場所に、オレンジの閃光が通過した。

ぐんつと、機首が下を向き、高度が下がり始める。

「よし、機首を上げるタイミングは、任せる」

「了解」

猫は、高度が900m以下になった途端、ハイGターンで、機首を持ちあげ、再び上

昇する。

なるほど、スナイパーライフルによる狙撃か。となると、狙撃ポイントは、高台か。  
「シエルフ、進路を東高台に、向けて」

機体の向きが高台を向いて途端、俺は、機銃を高台に向け連射をした。

「地对ミサイルを使う」

ミサイル発射トリガーを引き、ミサイルを二発、放つ。

亜音速まで、加速したミサイルは高台に着弾すると同時に、爆発を起こした。

「やったか」

俺は、これで、終わったかと、シートに深く体を預けようとした。

バシンツ、バシンツ

鉄に平手打ちをしたような音がコックピットまで響き渡る。

「主翼に被弾。ダメコン出来ません」

「な、何イイ」

コックピットの窓から翼を見ると、根本に被弾したのか、酷く煙を出していた。

「あの様子だと、ページは無理か、操作をこちらへ」

「YOU have control」

「I have control」

俺は、そう言いながら、俺たちが乗っているトム猫を急降下させた。

## 第5話空中戦がダメなら、地上戦があるじゃない

2055年4月2日 午前9時25分 黒塚 友哉

「シエルフ、高機動モードへの移行を実行しろ、早く」

俺は、高度計とコントロールパネルを交互に目をやりながら高機動モードの準備をする。

俺は、後ろの席を見ると、緑髪の女の子が返事をする。

「了解、30秒後に移行しマース。それまでに、escapeお願いしマース」

「武運を」

俺は、スロットレバーを抜き、シートの下側にある脱出レバーを引いた。

コックピットハッチが開くと共に、俺の席が打ち上げられる。

「つくー!」

全身に強烈なGが襲い掛かる中、俺は、シエルフから無線が来る。

「準備完了デース。さあ、マスター、カウンターを開始するデース」

「そうだな。ここからは、俺たちのターンだ」

俺は、スロットレバーについているダイヤルを空から機に回した。

直後、トム猫に変化が起こる。

スラスターが伸び脚に変形し、尾翼は折り畳まれスカートアーマに、左翼は立ち上がり、右翼は、スライドしながら右腕に、機首は、格納されていた左腕を展開しながら左側に曲がり人型に変形する。

「クイックな機動で1対1をするための高機動モードだ、さあ、今のセッチーには、狙撃は出来るか？」

高機動モードになったシエリフは、森の中へと落ちていった。

2055年4月2日 午前9時27分 古風五十鈴

「まさか、ヤキトリとメアリーの同時狙撃で、仕留めたと思ったら、変形するとはな」  
「ええ、しかも、森の中へ消えてしまっなんて」

俺とメアリーは、ミサイル攻撃をなんとか回避できたが、爆風により、俺は、煤で黒くなり、メアリーは、ドレスが吹き飛び、半裸に近い格好をなっていた。

「マスター、ヤキトリからの情報は？」

「今の所、無い」

俺とメアリーは、今、木の枝から枝へと飛びながら、索敵をしていた。

「よっつと」

俺は、近くにあった太い枝につかまり、一旦止まる。



「マスター？」

メアリーも同じように止まり、何故止まったのか、聞いてくる。

「メアリー、今、来ている物、すべて脱げ、下着もだ」

メアリーは、命じられるままに、ドレスや下着を脱ぎだす。

「全部、脱いだら、衣服をあそこの岩の側に投げろ」

メアリーは、ドレスとシューズを丸めブラジャーのカップに入れて、片方のカップで蓋をしストラップで、縛りボール状にし、ぶん投げた。ボールは、岩にぶつかると、中身が巻き散らかした。

「なるほど、まき餌ですか。てつきり、私は、このまま、野外ブゴッ」

「うんなわけあるか！」

俺は、メアリーの口をふさぎ黙らせる。

「そんなことよりも、空気迷彩を起動させて、狙撃準備をしろ」

俺は、メアリーから手を放し、スーツの電源を入れ、匍匐になり、後は、黒塚達が掛かるのを待つだけだ。

## 第6話いくら機械だっけえつて全裸で戦わせるつて

2055年4月2日 午前9時57分 古風五十鈴

まき餌を撒いてから約30分が過ぎようとしていた。

「ふああ、まだ来ないのか」

狙撃には、忍耐力が必要なのは分かっているが、それでも、暇なのは、我慢が出来ない。

が、暫くすると、スコープに影が見えた。

「敵機を視認した。2時方向、アップ0.4. ライト0.3」

横でスナイパーライフルを構えている、全裸の狙撃手に情報を伝える。

どうやら、俺が暇を感じてる時間はそう長くはなかったようだ。

スコープの集音マイクの電源を入れるとスラストターの独特な駆動音が聞こえた。

双眼鏡で、3時の方角を見ると、首がない鋼の巨人が迫ってきていた。

「あれ？ここも敵サン、いませんネー」

「そうだな、はぁー、レーダーが壊されたのがここまで、響くとは」

二人の話声が双眼鏡の集音マイク越しに聞こえてくる。

なるほど、あの戦闘機は、飛行形態と人型に変形するのか。

「メアリー、向こうも変形なら、こちらも変形するぞ」

メアリーと拳を合わせ、俺たちは、刃井

「分かりましたよ。マスター」

メアリーの主武装である、可変式狙撃分隊支援銃ラ・モルトには、スナイパーライフルとしての使い方の他にもう二つある。

「準備完了しました」

小声で、メアリーが準備を出来た事を教える。

「1マガ、100発だ」

メアリーにドラムマガジンを渡し、有効射程距離に目標がいるのか測る。

「有効射程まで、残り3Mだ。空転（、）を（、）開始（、）せよ（、、）」

ラ・モルトの銃身が高速回転を始める音が、耳を切り裂き始める。

1mまた、1mと鋼の巨人が歩み寄る。

「射程に入った。撃てー」

ラ・モルトから無数の弾丸が放たれる。

「待ち伏せか」

鋼の巨人は、腕を交差し防御をするが、ライフル弾の弾幕は前では意味がなかった。

「フ○○ク」

巨人が暴言を吐きながら背中からミサイルが放たれる。

ミサイルは、俺たちが立っている枝に向かってくる。

「メアリー、飛び降りぞ」

俺とメアリーは、すぐさま枝から飛び降りる。

「もう、迷彩の意味は無いから姿を現してもいい」

俺とメアリーは、迷彩を外した。

2055年4月2日 午前9時58分 黒塚友哉

「射程に入った、撃てー」

セツチーの声が聞こえたかと思うと、突然、弾幕の壁が迫りくる。

シエルフは急いで防御をとったが、トム猫の装甲では、この弾幕に耐え切れない。

「フ○○ク」

シエルフは、なす術もなく蜂の数にされていく。

よく考えろ、俺、この状況で何が出来る？

俺は、周囲を見渡すと、俺たちからちよつと離れた位置に生えている大木、その枝か

ら弾丸の雨が発射されていた。

「シエルフ、目の前の大木の枝に向かって、ミサイルを撃て」

トム猫の左翼からミサイルが撃ちあがる。

ミサイルは、大木の枝に、命中する。

「シエルフ、砂煙を上げろ」

「了解デス」

トム猫の右足のスラスタターが炎を噴き上げえ、砂煙を巻き上げトム猫の姿を隠す。

よし、これで、罨の設置は完了した。

俺たちが張った罨は、大きな口を開けているぞ。俺は、勝利を確信し拳を握り込んだ。

「そんな、小細工は効かぬ」

しかし、煙はセッチーの戦闘侍女人形による弾幕によって消された。

「私の愛銃の名前は、ラ・モルト・・・死神って意味、死神からは、逃げられないわ」

消えてゆく、砂煙の中から、ミニガンらしき銃を持った全裸の戦闘侍女人形とセツ

チーが姿を現す。

「はっ、メアリー、黒塚の戦闘侍女人形の姿がない」

よし、罨に掛かった。

「きやっ」

突然、メアリーの足元が小さな爆発が起こり、メアリーが地面に吸い込まれる。

「今だ、シャルフ」

「はあああ」

上空から、剣を前に突き出しシエルフが落下してくる。

「メアリー」

落とし穴から上空に向けて、無数の弾丸が撃ち上がる。

トム猫の装甲が剥がれ落ちる中、左肩からシエルフが飛び出す。

無人となった鋼の巨人は、そのまま、落とし穴に剣が突きそうとしたその時、落とし穴から青い閃光が放たれる。

青い閃光は、トム猫を包み込み、元素レベルまで分解していく。

「はあ、私、言ったよね？死神から逃げられないって」

落とし穴から全裸の少女が出てくる。

彼女が持っている、レールガンがスナイパーライフルに変形し、シャルフに標準を合わせていた。

クソ、あの体勢からだ、確実にヘッドショットされる。

俺は、悲鳴に近い声を上げた。

## 第7話 決着

2055年 4月2日 午前10時03分 黒塚友哉

「や、やめろー」

俺は、悲鳴に近い声で叫ぶがメアリーは躊躇いもなく引き金を引いた。放たれた銃弾は真つすぐにシエルフの喉元へ着弾しようとしたその時。

シャルフは口を大きく開け歯で銃弾を受け止める

「な、銃弾を口で受け止めたですつて」

メアリーが金切り声を上げる。

そんな彼女を睨みながら、シエルフは弾を吐き出す。

「ツチ」

メアリーは予測が外れた怒りからか、ラ・モルトを連射するがシエルフはしゃがんだり身体の立ち位置を少し変えたり仰け反ったりして全弾躲す。

「マスター、弾込めをして」

「分かった。射撃がダメなら接近戦で挑め」

メアリーはライフルをセツチーに投げ渡しセツチーは黒い傘を投げ渡す。

「シエルフ、近接で決着をつける」

シャルフはベルトからナツクルを取り出し両手に嵌める。

「sir yes sir」

シエルフは地面を蹴り一気に距離を詰める。

距離を詰めたシャルフは、メアリーの鳩尾に右ストレートを叩きこむ。

メアリーは防ごうと一歩下がろうとするが間に合わなかった。

メアリーのお腹から下半身のミツシヨンが壊れる音が響きメアリーは俯く。

ミツシヨンが壊れた事により下半身の動きが鈍くなる。

シエルフは追撃するために拳を空高く突き上げ手を組む。

うあ、ダブル・スレッズ・ハンマーをするつもりだ。

俺の予測道理に組んだ手をハンマーの様に振り下ろす、その威力は例え、人間がやつても背骨を骨折させる程の威力がある技だ。

メアリーの背中に届く寸前、突然、シエルフの拳がガラスの様に飛び散った。

「え？」

シエルフが間抜けな声を出す。

何故なら手首から上に花が咲いており、人工血液が噴出していた。

少し遠く、二人から離れた木に一匹の鳩の嘴から煙が上げていた。



「まずい、シエルフ、急いで距離を開けろ」・

俺の命令を実行する前に、メアリーが動く。

メアリーは、シエルフの首を傘の先で切り裂く、しかし、互いが無理な姿勢をしている為、外頸静脈を浅く切ることしかなかった。

シエルフは、右足を払いメアリーを転倒させ左足を上げ振り下ろす。

メアリーは振り落とされた足を傘で突き刺す。

「シエルフ、グレネードだ」

体勢が崩れようとしているシエルフの太ももに巻いているベルトからグレが落ちる。

「ちよっ」

メアリーは、傘でグレネードを弾こうとするが上手く抜けず、爆発が起きた。

「メアリー」

「シエルフ」

俺とセツチーは、同時に愛機の名前を叫ぶが、爆風の中から返事はなかった。

換気装置によって爆煙が、徐々に晴れて二人の影が見えてくる。

良かった、まだ行けそうだ。

俺は、シャルフが無事なことに安堵した瞬間、シエルフらしき影が揺れ地面に倒れた。煙の中から、内部機構が丸見えになった状態のメアリーが出てくる。

『…ザザザ…』

メアリーの損傷は激しく、発声機の管がズタズタに裂けていた。

それに対しシエルフは、メアリーの傘が頭部に突き刺さっていた。

「俺は、シエルフの側まで歩き、傘を抜こうとしたが深く刺さっており抜けなかった。なるほど、あの爆発の中でメアリーは大破を覚悟で引っこ抜くじゃなくて更に突き刺して、右足ごと頭部に突き刺したのか

「互いに持っている力を振り絞ったいい試合だった」

「素晴らしいながらセッチーは俺に手をさしだす。

「だな、次は負けないよ」

俺とセッチーは、握手をした。

## 第8話 賽は相手の顔面に向かって投げられた

2055年』4月2日 10時6分 彩雲辰人

「次は誰がしますかね？」

瑠璃川先生が周りを見渡す。

「オレがやる」

遠藤が立ち上がる。

「俺が相手になる」

俺も手を上げ立ち上がる。

さっきの試合を見て、少し興奮して来たし、ド派手にやってやろう。

「分かりました。では、どちらが対岸に行きますか？」

「俺が行く俺なら対岸に行くのに5分かからない」

俺はそう言い少し身体を伸ばす。

「オレは構わないぜ」

「ありがとう、ああ、遠藤よ、少しハンデを上げようと思う。遠藤、お前の戦闘侍女人形を何体持っている」

俺の言葉を聞いた遠藤は少し機嫌が悪そうな顔になる。

「それを聞いてどうする。こちらの戦力を明かす訳にはいかないだろう」

遠藤が少し身構える、まあ無理もないか。

「では、言い方を少し変えよう。俺の所持戦闘侍女人形の数は9体だ。別に9対Xをしてもいいなら、ハンデを付けないが」

遠藤は少し考えて口を開く。

「お願いする」

「いいぜ、ではこのサイコロを投げてくれ」

俺は胸ポケットからサイコロを2つ渡す。

「こいつを二回投げろ、出た目がお前の相手だ」

遠藤はサイコロを受け取り、賽の目を確認する。

「おい、このサイコロの目、一つは3までしかないし、もう片方は5までしかないぞ」

「大丈夫だ、問題はないそれは特殊なサイコロだ、別にイカサマとかではないから安心して」

遠藤はおもむろに手の中でサイコロを転がして投げる。

「2と3」

サイコロを拾ってまた投げる。

「4と3か。OK」

ほう、面白い組み合わせだ。

俺は、先生から信号弾を貰い、皆から少し離れる。

機械語を呟き、全身のナノマシンに指示を出し、強く地面を蹴った。

2055年 10時10分 遠藤拓哉

「あいつ、実は戦闘侍女人形じゃないよな」

突如、彩雲がジャンプしたと思うとはるか向こうに着地してまた、人間じゃないレベルのジャンプをする。

彩雲の影を眺めているとクラクションが鳴り響く。

「マスター、到着しました」

振り返ると重武装されて洋式霊枢車が止まっていた。

I・C社製強襲型輸送装甲車ヘリオン、それがオレの愛機の一つだ。

サイドハッチから中に入りヘリオンに声をかける。

「ヘリオン、準備はどうだ？」

「エンジンは良好。セッティングも大丈夫です。火器系統のチェックはまだですが」

「なるほど、火器系統まだなんだな」

弾薬棚から弾を抜き自分の席に着く。

目の前のパネルを叩き、レールガンの電源をつけ薬室に弾を込める、安全の為セフティを掛けておく。

「シユバルツ・クーゲル起動。安全の為セフティを掛けておく」

更に、パレルを叩き、火炎放射器と重機関銃の状態を確認する。

「ジャンヌ、起きろ。13ミリ機関砲をマニュアルにしたから、試射をして」

弾薬棚のとなりの棚から箱が落ち、形が崩れ小さな機械がたくさん出てくる。

『承知しました』

小さな機械が再び集まり少女の形をつくる。

「ジャンヌ、起動しました」

ジャンヌは、起動の報告を言いすぐさま銃座に登り、機関砲の試射をする。

「機関砲、異常ありません」

「了解した、後は、あちらの合図を待つだけか、ヘリオンなんか曲を掛けて」

ヘリオンはカーステレオのスイッチを入れ、適当に選曲した。

2055年10時10分 彩雲辰人

「お、見えた、以外に早くついたな」

崖の上に、人影を二つ見つけ、着地体勢をとる。

踵から付き、小鳥が木にとまるように地面に着地する。

「その様子だともう出撃できるのか？」

バイクに跨り、煙草をふかしている女性：スカイライナー卯月参式に話しかける。

「後はマスターの準備くらい、如月式式はその辺りで遊んでるよ」

「そうか、後は俺だけか」

コートの内側から対暴走戦闘侍女人形兼信号銃香里4式を抜き、信号弾をマガジンに入れいつでも撃てるようコートの金具に引っかける。

ポケットから仮面を取り出し嵌める。

「ところで、この組み合わせって珍しいよな？」

仮面の電源を入れながらぼつりと呟く。

「そうだね。これが初めてかな？」

卯月は、小さくなった煙草の火を消し携帯型灰皿に入れる。

「これから先もこの組み合わせになるかも知れないからデータ収集をしないと」

仮面と義手を連動させる。

「分かったわ」

暗かった視界が明るくなり、視界情報が表示する。

「如月、卯月、出撃だ、マハに乗り込め」

卯月がバイクのエンジンを掛け、ローブを纏った少女がスラスタ―付近につかまり、俺は卯月の後ろに跨る。

コートについているフードをしつかり被り、対暴走戦闘侍女人形兼信号銃香里4式を抜き信号弾を天井に向かって撃った。



## 第9話 ゲームスタートだ。

2055年4月2日 10時15分彩雲辰人

「卯月！」

俺の掛け声と共に卯月はバイクのスロットを全開にあけ崖からジャンプする。

「如月参式は、森の中に入り次第、後方から追従しろ」

「追従了解……クシシシ」

ローブを纏った少女、如月参式は復唱しながら不気味な笑いを出す。

俺の友人がプログラムを作ったが、こいつの戦闘狂じみた思考回路は好きだが、たまに引いてしまう。

「着地する、しっかり捕まれ」

卯月はバイク各部についているスラストアームを操作しながら着地しスロットを開けながら森の中に入ってゆく。

「じゃあね」

如月参式はそう告げるとバイクから飛び降り地面を転がりながら、俺たちの後ろに付く。

卯月の愛車マハのエンジン音と横側と後ろに付けられたスラストターの音が響く中、俺たちは川岸に出る。

「馬鹿な、人工川だとこんなもんまであるのか」

俺は、マハから降り、深さを見る。だいたい1mくらいの深さか、ホバー走行なら向こう岸に行けるな。

「卯月、ホバー走行で渡れそうだ」

卯月は後輪を高回転させながら前輪を軸に回転をする、所謂マックススターンって奴だ。

マックススターンをしながら前輪、後輪が横に90°回転しホバー走行になる。

「マスター」

卯月の合図とともに発進するマハに乗り込む。

急発進したマハは、水面に波紋を立てながら川を横切る。

川岸に着き通常走行に戻り地図を確認しようとした瞬間、マハとは違うエンジン音が、かすかに聞こえてきた。

義手についているパネルを叩き、サツキシステムとリンクする

すると、画面が三分裂画面になり、俺の視界、卯月の視界、如月の視界が画面に映し出される。

卯月は全武装の安全装置を外し胸ポケットから煙草を取り出し啜える。

『卯月、聞こえるか？俺の近くで、煙草を吸うな』

『ツチ、分かりました、火はつけないんだっただらいんだろ？』

俺はテストも兼ねて無線で卯月を注意するが一方的に切られる。

卯月はこう緊張する場面や賭けをする時など、煙草を吸うプログラムが何故、ある。不思議な事にそのプログラムを消しても再びある。

一方、如月はカメラをサーマルに切り替えては周りを見渡しコスモグラノ反応探知カメラに切り替えては周りを見渡す。

如月の視界に、森の中を突き進む霊柩車を捉えた。

さて、先制攻撃はもうせ。

2055年 4月2日10時15分 遠藤拓哉

「さて、どうしようか？」

俺はシュバルツ・クーゲルの電力供給機のハンドルを回しながら作戦を考えていた。

「ヘリオン、何か、いい考えはないか？」

ヘリオンは、ハンドルをさばきながらしばらく考える。

「この先に、人工川があったはず、そこ一歩手前で、待ち伏せてどうです？」

「いいな、それ」

作戦が決まりヘリオンの速度を上げ森の奥へ走り出した。

## 第10話 砲弾の嵐の中で

2055年4月2日 10時17分遠藤拓哉

『ナニカ、イヤナヨカンガスル』

突然、シヤレ達が騒ぎ出す。

シヤレ達が集まりだし姫騎士の影になってゆく。

「どうした、ジャンヌ?」

シヤレの集まり…ジャンヌは、鎧の動きを確かめ銃座に上がる。

「さつき、誰かに見られたたような気がしました。ヘリオン、速度を落として」

「私のレーダーには何も写ってないですけど」

「僅か一瞬、赤外線スキャナーをあてられたわ」

ヘリオンは、ジャンヌに言われるまま速度を落とし徐行する。

俺はシートベルトを外し、運転席を覗くレーダーを見る。

レーダーには何も反応してないか。

けど、ジャンヌがなにかに反応したら、何かやばいのが来る。

オレはシユバルツ・クーゲルの砲門を開け、砲身を車から出し席に戻った。

2055年4月2日 10時17分 ジャンヌ

—————

誰かに見られている気配が増えた、演算開始：演算完了。

「マスター、敵にこちらの位置がバレてる。攻撃が来ます」

マスターに報告したとたん、近くの草むらに何か落ちる、私は銃座から確かめると。

草むらの中にパイナップルみたいな形物体があった。

「グレネード」

つかさずマスターに向かって叫ぶ。

グレネードが爆発し、泥が飛び散る。

ちらつと天井を見ると、グレネードが、二発落ちてくる。

「迫撃だ、今度は二発」

急いで、機関砲で撃ち落とす。

次に金属反応装置が警告を発する。

4時の方向を見るとミサイルが迫りつつあった。

「ミサイルが来る、ヘリオン、フレアを焚いて後方に下がって」

装甲車の後方から、フレアが出てくる。

ミサイルはフレアに誘導され、明後日の方向で爆発する

「ジャンヌ、さっきからバックできない、タイヤに何か異常がある」  
ヘリオンが大声で叫ぶ。

「マスター、銃座変わってくれませんか？タイヤを見てきます」

銃座から飛び降りタイヤを確かめる。

右前輪異常なし、左無し、後輪――

後輪を見ようと後ろに移動しようとした瞬間、首に鎌をかけられる。

「ツシャ」

摩擦音とともに、鎌が引かれた。

2055年4月2日10時17分 遠藤拓哉

――

「おい、ジャンヌ、タイヤはどうなってる？」

無線でジャンヌに呼びかけをするが、反応がない。

それに、ジャンヌが降りてから、迫撃が止んだ。

「ヘリオン、仕方がないジャンヌを置いて全速前進だ。バックがダメでも前ならいけるかもしれない」

ヘリオンは、バックから1速に入れアクセルを踏み込む。

車体が大きく揺れ、壁に頭を打ちながらジャンヌに合流地点を送る。

相手が迫撃をして来たことは、武装は迫撃砲と対戦闘侍女人形マイクロミサイルポッド、タイプは：多分：ヘリオンと同じライダータイプか対ライダータイプに特化したスナイパータイプか。

俺は火器が生きているかチェックしながら、相手の居場所を考える。

「ヘリオン、左折しろ」

俺は、銃座から頭を出し索敵をする。

2055年4月2日10時17分 ジャンヌ

—————

鎌が首の人工皮膚を切り裂かれようとした瞬間、全身をシエレに戻し、ジャンヌに戻りながら回し蹴りを放つが、そこには何もなくなつただ空間を蹴っていたのだ。

「残念」

再び、背後に何者かの反応を捉え、シエレになり今度は背後に下がりがら0.3ミリレーザー砲で反撃をする今度は手ごたえがした。

ジャンヌに戻り相手を睨む。

そこには、黒いローブを纏つた少女が不気味な笑みを浮かべながら立っていた。

レーザー砲は、少女のローブを射抜抜いていたが、大したダメージ入っていない様子だ。

目標を捕捉：反撃を実行する。



目標に距離を詰めながらグランディウス・イルダイヤを構える。

出力50%、グランディウス・イルダイヤの刃が光出す。

「はああ」

身体を一回転するように勢いをつけ斬りつける。

少女は、大鎌の柄で、私の斬撃を受け止める。

「シヤ」

少女は、摩擦音を発すると共に、鎌の柄が収縮し、私の目の前が暗闇に包まれた。

柄を収縮し、鎌で私の頭部を跳ねたと理解するひ、ひ、暇。

メールを一件受信しました。

2055年4月2日 10時24分

—————

あれから、7分が経ったか。

手元の時計から、シユバルツ・クーゲルの画面に目を移す。

俺達は今、細い道を時速130kmで駆けている。

このまま、走っても意味は無い、今度はこちらから仕掛けなければな。

俺はセカンドスクリーンを立ち上げる。

「ヘリオーン、速度を落としてくれ。ソナーを放つ」

ヘリオンの速度が落ちていく。

天井に設置されているレバーを三回倒し、ソナーに電力を送る。

ソナーと言っても潜水艦についているソナーとは違い、ヘリオンの屋根についている棒から超音波で、敵機を見つける、ヘリオンのもう一つの目だ。

ソナーボタンを押し、モニターを見る。

モニターは、SDキャラで表示されたヘリオンを中心に円が浮かびあがる、円は少しずつ広がると共に、オレンジの点が表示される。

オレンジのマークは、敵性反応を意味している。

もう一度、ソナーを押すと、オレンジのマークの他に、緑のマークが並列に並んでいた。

## 第11話 トラア!トラア!トラア!

2055年 4月2日 彩雲辰人 10時23分

俺は木の枝に立って作戦の復習をしていた。

を先制攻撃は卯月による迫撃で装甲車の足を止める、その間に如月式式が前輪にタイヤ止めを嵌める。

これにより前進した場合タイヤ止めのせいで出来ず後進することにやって外れ、進路を妨害できるわけだ、当然、タイヤの異変を確かめにもう一機が降りてくる、そいつを無効にし、後は、装甲車を倒せば俺の勝ちなのだが如月式式が首を刎ねた戦闘侍女人形…本当に倒したのか?

俺は、そんな疑問を浮かべながら如月に電話する。

「聞こえるか、如月式式?」

「うん?聞こえるよ」

俺は怒鳴るように声を出す。

「今すぐ、そいつの肩に指を突っ込め!」

画面を切り替え如月式と視点カメラになる。

如月式はおもむろに騎士の肩に指を突っ込む。

俺の予想道理、指を入れた場所から砂で出来た城のように崩れる。

如月はそつと指を抜き、目を落とすと1cm程のロボットがいくつも乗っていた。

如月はそれを握り潰す。

「如月、そいつから距離を離せ、ドラックモード準備」

ドールコントローラを耳から離す。

一旦木から飛び降りながら、携帯を操作する。

『select No.』

キーを叩き、2と3を打つ。

『skylliner kisaragitype3 ready』

ドールコントローラから音声と共に呼吸音に似た待機音が鳴り出す。

コートを脱ぎ右腕の袖をめくり上げ、人工皮膚をはがす。

人工皮膚の下から、金属繊維で出来た右腕が姿を現す。

「ふう」

息を吐き、頭の中を空っぽにしてドールコントローラを義手に嵌める。

胸部に強い痛みを感じながら、俺の意識は暗闇に墜ちていく。

20055年 4月2日 10時26分 ジャンヌ

もう死んだふりをやめても大丈夫だろう

少しずつ全身のシヤレに指令を送る。

首を動かし周囲を確認する。

マスター達と合流しなければ。

脚に電力を回そうとした瞬間。

「やはり、まだ生きていたか」

背後の声が聴こえ、急いでシヤレになりその場を離れる。

ジャンヌに再び変形しながら声を見ると、さつきまでいた所に灰色の触手が生えていた。

触手の後ろに、先とは姿が違う、ローブを纏った少女が立っていた。

否、それは少女というよりは死神といったほうがいいかもしれない。

「ファイタータイプか？それともトランサータイプなのか？」

死神はぶつぶつ独り言をいいながら大鎌を構える。

私は地面を蹴り、距離を詰め死神を切り裂く。

しかし、剣から伝わる感触は何もなかった。

頭の中にアラートが響き、目の前に大鎌が迫りくる。

急いで左に飛び込む。

「ありがとう。死神の霧に自ら飛び込んでくれて」

死神が薄く笑うと共に突如、視界が霧に覆われ体が錆びたように動かなくなる。

異常発生——異常箇所をパージ。

鎧の一部を切り離し、急いでその場を離れるが、背後から大鎌が飛んできた。

シャレに戻り、大鎌を躲す。

「っしや」

死神が摩擦音を発しながら鎌で私の目を切り裂く。

視覚システム異常、再起動不可、アイカメラ破損。

破損モジュール再構築、状況分析：レッド

## 第12話 「仕留めきれなかったか」

2055年 4月2日 遠藤拓哉 10時24分

「馬鹿な、ミサイルと並んで突っ込んでくるだど!? ヘリオン、ドリフトをしてくれシユバルツ・クーゲルで撃ち落とす」

ヘリオンはブレーキしながらステアを切る。

車体が横に向き強力な横Gが身体を襲う。

Gで身体がシートから投げだされないよう踏ん張りながら照準を睨む。

横に流れる景色の中、バイクに跨った戦闘侍女人形と周囲に飛ぶミサイルを見つけ、引き金を引く。

砲身が光り、砲弾が音速で吐き出され、少女の頭部へ飛ぶ。

だが、俺の目の前で信じられない事が起きる。

そいつは横にスライドしながら弾を回避したのだ。

曲がったというよりもラインをそのまま横にずれたように曲がった。

「どうやって、回避した。つく、フレアを発射、回避機動を取れ」

フレアが撒かれる音と共に、車体が大きく揺れる。

「つく、紫外線追尾型だよ、マスター」

ヘリオンの警告が耳に入ってくる。

機銃を半自動モードで、ミサイルを迎撃するがなかなか落ちない。

「ヘリオン、耐ショック体勢」

その直後、凄まじい衝撃が体を襲った。

2055年 4月2日 彩雲辰人 10時25分

FFBによる固い感触が手に残る。

この戦闘侍女人形の両眼を潰した。後は、スイカイライナー如月参式の特特殊武装、サイレントミスト死神の霧死神の霧で錆びされるか。

騎士に向けて翼を向ける。翼から白い霧が噴き出ており、騎士を包み込む。

この霧の半分はナノマシンで出来ており触れたものを錆びさせることが出来る。

「さて、後は、一機か、うん?」

ちらつと、騎士の姿を見る、切り落とした記憶がないはずの右足と半透明の剣が鞘ごとないことに気が付く。

『マスター、逃げられましたね』

「ああ、しかし、この様子だと、本体と少量のこの変なモジュールしかないみたいだ」

俺は、一旦肩の力を抜き、意識を電子世界に向ける。



視界がしばらく暗くなり光が戻ると、そこには、青色の海とうんざりするほど晴れた空が広がる。

「如月、一旦ドラックモードを解除する。俺は少し休憩するから」

『分かったお疲れ様。マスター』

空から如月の声を聴きながら俺は現実世界に意識を切り替えた。

2055年 4月2日 遠藤拓哉 10時34分

「うう」

重い瞼を開けると、ヘリオンの天井が顔の近くにあった。

おぼろげな意識でシートベルトを外したとたんに頭を強く打つ。

「いつてえ。クソ、ヘリオンがひっくり返ってやがる」

だんだん意識がはつきりしていくなか、床のパネルを開けてリペアキットを出す。

「ヘリオン、大丈夫か？」

「ええ」

運転席から大きな音が響く。

「マスターの方は？」

「五体満足だよ。まあ、この調子だところうちのヘリオンは相当ダメージを受けているけど。」

不幸中の幸いか、火災にはなっていないし、エンジンと足回りが生きていたらまだ戦えるはず」

サイドハッチを開けリペアキットを持って外に出る。

「これはひどい」

奇跡といった方がいいかヘリオンはあれだけのミサイルを受けに関わらず、ほぼ無傷だった、しかし、ミサイルの爆風のせいも、車体はひっくり返ってしまっている。

そのせいで、もう機関砲はダメだろう。

「不幸中の幸いか、ヘリオンを起こすだけでまだ戦えそうだな」

俺はリペアキットからチャコ車を取り出し、霊枢車を起こす準備をする。

# 第13話 ぶったな。母親にもぶたれた事がないのに

2055年 10時40分 遠藤拓哉

リペアツールからチェコ車を取り出しヘリオンのシャーシにワイヤーを結ぶ。

ワイヤーをチェコ車に噛ませ鉄棒を差し込み、歯車を回す。

少しずつだが、車体が持ちあがってくる。

「はあ、はあ、はあ」

ヘリオンが起き上がってくるにつれ、鉄棒が重くなってくる。

「はあ、はあ、はあ、ヘリオン、変わってくれ」

半分起き上がったところで、ヘリオンに代わり木陰に座る。

あの様子だと、機関砲は死んだか、ジャンヌが無事ならシャレを分けて再生は出来そ

うだがどうするか。

作戦を立て直そうと考えていたその時、後ろの茂みから影が飛び出す。

「ジャンヌ、敵襲にて合流遅れました、シャレを52%損失」

所々葉をつけた金髪の騎士、ジャンヌが地面を転がりながら報告を上げる。

「無事だったか、しかし、中破ってどうした？」

言われてみたら、二回り小さくなったジャンヌは立ち上がり少し悔しそうな表情をす  
る。

「敵戦闘侍女人形と遭遇、容姿はローブを纏った少女でしたが、突如、死神のような姿に  
変形、その後一方的に…。武装は大鎌と酸性の霧です」

変形するタイプの戦闘侍女人形だと、となると変形が出来るトランスタイプ…まさ  
か。

「おい、そいつ、変形前と変形後、なんか様子に変化はなかったか？」

「…確かに、戦闘を楽しむ少女から急に私の身体を調べようと思いましたし、何より大鎌を  
振る時、摩擦音を発する癖がなくなっていました」

俺の頭の中にドラックタイプの文字が浮かぶ。

戦闘侍女人形とオーナーの意識をリンクし、プログラムとは違う別次元の動きを可能  
とした戦闘侍女人形、しかし、使用者の身体には負荷がかかるため、使用する選手があ  
まりいなくて都市伝説と言われていたが…、まさか、クラスメートにいたなんて。

俺は彩雲の戦闘侍女人形の恐ろしさを感じたその時、地面が揺れた。

「マスター、作業終わりました」

ヘリオンがリペアキットを渡し来る、彼女の後ろにはヘリオンが起き上がっており走  
れる状態になっていた。

「どうやら、マスターの方までこずったようね」

ジャンヌは、溜息をはくように肩をすくめ、俺を起こした。

2055年 11時05分 彩雲辰人

「卯月、合流だ。一機逃がした、奴も遠藤に合流するつもりだ」

『了解、私の方も、一機、止めを刺しそこなったわ。ミサイルの爆風で、斜面を転げて落ちていった』

「そうか、でも次は逃がさせわない」

卯月は俺の言葉を聞き無言で通信を切る。

「マスター。次の作戦はどうするの？」

大鎌を持った戦闘侍女人形、スカイライナー如月参式が少し不安そうな顔で見上げてきた。

「大丈夫だ、今度は真正面から全力でねじ伏せてやろうぜ」

そつと如月の頭を撫でながら卯月を待つことにした。

12分後

卯月が戻ってくる。

「お待たせ、二人とも乗って」

俺と如月はマハに跨ったりもしくはしがみついて発進する。

「卯月と敵機： $\beta$ が戦った場所の近くに小さな洞窟があるらしいな、もしかしたらそこでダメコンをしたり、 $\alpha$ と合流したりするはずだ」

サツキシステムの解析によって出来た地図を見ながら遠藤の居場所を探る。

「よし、その洞窟の手前に向かおう、奇襲作戦を思いついた」

「了解した、マスター」

卯月はアクセルを開け最高速度で一気に駆け上がった。

洞窟から400mから離れた森の中、俺達はマハから降りた。

「よし、これから指示をよく聞いておけよ。」

卯月、今すぐパレットスコール改に消音器をつける、つけ終わり次第に、このあたりの照明を破壊しろ。如月は、洞窟前に待機しろ」

「了解」

如月は透明になりながら洞窟に向かい、卯月はマハからパレットスコール改を抜き消音器を銃口につけ、天井の照明を撃ち抜いた。

2055年 11時18分 黒塚拓哉

近くに洞窟を見つけたのでそこで、ダメージコントロールをしていた。

ヘリオンの損傷状態は酷く修理が出来ない箇所が何か所もあり、内側から鉄板で蓋をして特殊接着剤で固定の作業を繰り返していた。

装甲の穴や傷は埋まっていくが、埋めていくにしたがって勝算が見えなくなってないっていく。

「やはり、機関砲はパージするしかありません、兵装が火炎放射器とシュバルツ・クーゲルのみになります」

ヘリオンが銃座周りの修理を終え梯子を下りながら聞きたくない事を言ってくる。

「ヘリオン黙れ、今の俺達に、あいつに勝てない。機関砲を失った、ジャンヌは中破したこんな状態でどうやって勝てばいい」

それだけではない、彩雲の戦闘侍女女人形も今のジャンヌやヘリオンには刃がたたない、俺の指揮だつてろくにできてないのに、彩雲は自分の手足のようにうごかせるんだ、勝てるわけがない。

俺は、やり場のない絶望感を拳に乗せ壁をぶん殴る。皮膚がさけ、少し血が滲みでる。

「マスター」

ジャンヌが俺の名を呼びながら近づいてくる。

次の瞬間、右頬に衝撃が走った。

「武装がひとつ死んでも、まだ、私達が生きているなら、勝てる確率は0%ではありません

ん。ヘリオンも私もまだ、諦めていません。これから先、もつと強い敵だっているのです、それが同級生に勝てないって諦めたらこの世界では生きていけません」

俺はジャンヌの瞳をみた、人工の瞳には「まだ行ける」そう訴えているように見えた。それと同時に、胸の内側から何かがこみ上げてきた。

「ジャンヌ、俺が悪かった。お前のおかげで勇気が湧いてきたよ、修理完了まであとどのくらいだ？」

ジャンヌは、少し微笑んだ。

「マスターの心の修理で最後です」

ジャンヌが珍しく冗談混じりの報告を言った瞬間、洞窟の外が暗くなった。

2055年 11時32分彩雲辰人

卯月のおかげで周りが薄暗くなっていく。

「よし、次の段階に移る、如月、卯月、ドラックモードになるぞ」

折り畳み式の携帯型ドールコントローラを取り出し片手で開けメニューを開く。

ドラックモードのメニューを開く。

「ダブルリンク」

『select No.』



2と3、4と3のキーを素早く叩く。

『skylliner kisaragi type3 skylliner uzuki  
type3 ready』

音声と呼吸音みたいな待機音が鳴りだす。

俺は頭の中を空っぽにしながら、右腕の義手にドールコントローラを嵌める。

心臓の鼓動がよくなり、血が早く身体を駆け巡る。

そして、俺の意識が彼女達の世界に引き込まれていった。

うんざりするほど晴天な空とだけの世界に俺は立っていた。

これが如月と卯月の：俺とスカイライナーシリーズの世界だ。

この世界、俺の脳と戦闘侍女人形のAIの境界だと言われている、これより先にすすむと俺の脳は彼女のAIと一体化するからだ。

「如月行くぞ。その次に卯月だ。俺も相手もド素人だ、加減なんていらぬし防衛だつて気にしないで行こうぜ」

頭の中で如月の姿を思い浮かべ子供の頃遊んだ変形ロボットを変形させるようイメージする。

まず、如月の上半身と下半身を分割する。

下半身を先に変形させよう、まず股を開き、太ももをスライドする。死神の霧の噴出

口が出てくる。

脚を曲げ内腿うちももと脛すねをつなげバックパックの変形が完成する。

次に上半身、まずは腕の装甲をパージする装甲の下から白い骨のようなフレームが露出する。パージした装甲のジョイントをつなげて盾に

胸部装甲が開き、肋骨の形をした内部装甲が展開する。

顔の人工皮膚が溶け出し髑髏が浮かび上がる。最期にバックパックと背中を接続し如月参式ドラックモードの完成だ。

次に卯月の変形だ。

まず、両膝を曲げ、肩付近から後ろに曲げる、肩があつた場所に空洞が出来る。

マハの後部に搭載されている対戦闘侍女人形ミサイルポッドを分離、コ字のパーツが一の字に展開し空洞に入りミサイルポッドから腕が出てくる。

マハからパレットスコール改を抜き背中腕に持たせる。

ボンネットを引っっこ抜き胸の近くに寄せると、ボンネットからサイドアームが伸び卯月の身体にドッキングする。

最後に失つたボンネットの代わりに馬の首が生え、タイヤホークが足に変形し機械の馬に変形する。

「よし、ドラックモードに無事なれたか、あ、ゲイボルク転送、安全装置はそのままだ」

卯月の手に8mの長さの銀槍、ゲイボルグが転送される。

ゲイボルグを一振りし、状態を確かめ如月に通信を入れる。

「よし、如月、戦闘演算を任せる。先に仕掛ける」

『クシシ、先に行つて奴らの首を狩つておきます』

如月はそう言い残し通信を切つた。

一人人間が居るんだが、まあいいか。

俺はマハを走らされた。

2055年 11時32分遠藤拓哉

洞窟の外が暗くなつてから外から金属同士がぶつかり合う音が聞こえてくる。

足音か？いや、まさか、ドラックモードに変形した音か。

弾薬棚から砲弾を取り出し装填装置に入れる。

「ジャンヌ、予備のシヤレとの接続は完了したか？」

ジャンヌをチラつと見る。

予備のシヤレを身体の一部に同化して、その具合を確かめていた。

「修復完了。気休め程度だけど、いけます」

「よし、ヘリオン。出してくれ」

「分かりました」

ヘリオンにエンジンが掛かり、車体が微動しだす。

ゆっくりアクセルを開け洞窟の外へと出る。

俺は索敵用窓から顔を出し、外を見る。

洞窟の外は薄暗くやや霧が出ていた。ん、霧だど？

いくら部屋が広くても、霧が発生するのか？

「マスター、この霧は例の戦闘侍女人形の……」

ジャンヌが声を上げると共に俺の視界隅に黒い影が飛び込む。

そう、黒いローブを纏い、大鎌を肩で担ぎ、鳥のような翼は持った死神を。

「会敵。9時の方向、死神みたいなやつが一体ジャンヌ行ってくれ」

ジャンヌがバックハツツチから飛び出す。

コントロールパネルを叩き、アクティブソナーを発射する。

緑色の画面に赤い点が表示される。

窓から顔出し、多機能付きスコープで赤い点の方角を見る。

「うそ……だろ？」

そこには、巨大な槍をもった騎士が迫ってきていた。

「ヘリオン、速度を上げながら左に旋回しろ、回避、速度をお前に任せる」

シュバルツ・クーゲルの充電を開始し、液晶パネルを睨みつけた。